KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
4455 〉10

へ10
4455
へ10
4455
昭和九年二月日購求

ほそうくるまに。日くらしすまにむかひて。さろ
ゆうこうをゆく。よなかこゑ。そこらとあく。
かれつくをハ。あやしうこそ。よのくるたにけも。いく
や。はせにもまれてハ。祈りくるくきとてをおほ
くあるを。みとれはくるのハいともかしこし竹乃そ
れよのそ忘ゑまて。人百乃種ありぬそ。やんとあれ。
一乃人のばあるさ海。をはちくを也。たゝ人とこ祈りか
と。たまゆるさを。ゆくしとらゐ。そのよむをこま
くハ。をとあをとふあをと。牧ゐ面めくし。それより
志もつくをハ。おとにつはけて。時よわひ。をうり
うゆるを。ゆくハいくしとおくをめと

いとゞ白がゝ。清水のいろ。やまぶきゝ。ぬるでの
あゝ。ぬるでの。赤のもゝ。紅葉。霧。
湖。みづうみ。かやぶきの。家。ようこそ。いきらひ。おくれ。
のゝ。つゆ。ゆかしく。ひつじ。ゆかしく。ひつじ。
ひゝめのいひ。ひんやり。ぬるゝ。佛の御
をゝ。ゝたゝ。ゝゝ。ぬるゝ。ひさゝの。せ
ゝく。人。ゆゝ。ぬゝ。ゝ。ぬるゝ。人を
叩。ちゝ。ゝ。海。ぬゝ。ぬゝ。ぬゝ。ぬゝ。
絵。ぬゝ。ゝ。ぬゝ。ぬゝ。ぬゝ。ぬゝ。
ありて。河。ゝ。ぬゝ。ゝ。ぬゝ。ぬゝ。
ゝれ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

性。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
つ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

をつとして。いみーと思ひ。而せたまふる人てそう
てゐよこころなくこゝろもち。衣冠よりて。る車にいるまて。
わるにたるひくもちひよ。毋蓑をとりもるるたうれ
ちそ。九条殿の。さ誠かも仰る。順徳院の。禁中にすす
ともかくせすつるかもおほ屋けの。ものうのハさうそう
なるとゐ川てよーと寸法とそて仰を

三

よろ川よ。いそーくともさまのまけんおのこハいと
けらくーを。玉のさうつきれ。そこあれをちそ
すき。つるもに去るかれて。而さめす。
ほとしあうき。おやのいさめ。世れそーつを
つもうこそ法のいとほををあのき

四　五

こうあよ思ひこんこうこそひとうと孫うちーまとうう
ひ衆なにこうぶうしのまこひとそひこまこだうん
そこあもやそうておやのやそうこす思うけんこそ。
あうもうーどうへよがさなん
仏の世れこうひよわもとで仏のみちこそうこう思
あうろうこ
不あうよどまへよどうめうこ人へがーらたうーなく
ふつうふ思ひうとこそうこそどこうるれの
よがこーこうこがつこうこくがーくーふこう。
ふうこうこよがうこもうり。弥生雲中鈴ふのうひうこ配
不の月飛ーくーこしこがをたほくゆこし

我身の歎しらしかくしてもまましく歎きかくさう
まことの子とうへ抱かれてまゐらすれば中書王九條太
政大臣花園左大臣これぞうさしもとゞねうひ
所へうまゝ渡るの花もしも子孫れしをねがふいはくふみ
のなくれのへくらずまゐら天しやとて世継の緒乃断絶
まそのゑくぞ二生遂太子乃ぞ御子くどうのまうつのもぬ
孫世にもおゝくと天皇のしら我をくず子孫ありもなし
思ふまりとぞかりけうとろや
わがしめの意ぞきほろ竹かく鳥部山ばかりけ立添ら
てのぞ須のうるすしひすしてもゆふ抱のあられもあら
らしぞ世をぞ宮守にしうがみしけ遂命ある抱とみるよ

人のうりぞひさしく天のくしがきろふのゆふともうちぞ夜の姥
の松秋くおもしろととおるそのしげくぞくとてとせと
くらひたくうしもおもふかぞみともしやおりぞれしとく
思ひくぞ子と手裁包すれもぞ一夜の宮はひらてそせの
おくとまぞの世母ようろくく天皇くともらくく被りはさん
命なりけ遂に辱おりしふりくとも今すひちゝね
おしうちしぞ死すしくそぞめやもうろくれけ遂ぞ書おとすれ
めれは離とそうひのかくぞよいくましらかしこ
よは思ひぞ夕の海は子孫くと想しくぞぬりゆくあまぞ
ろくしまくの命くあしましぞくまし世とひきそる
ひのこふくぞ抱の哀もおもしきぞ成行すしはめしき

八
世の人はじまりし事色欲よりおこりそ人のく
るしみあるも起りて色ひなしやむる事の起さる
ところ衰老となり起りて起りなれども
色ひをそむく起れば起る事の仙人の
起ある事女のたちのまへの色を絶みて通をうしなひ
そ諸さまあしきあへなのさかりは肥あかづく
たるしそおのれがすゝねじれをあやしく
九
女そ娘のめくるしさそくへのめぐみ趣りあれ人の
起じめくなしそ起つひさうけひきて搦うちも
志ら我まゝにふまゝくばらおかさるもくへのむと
まことしずゞく女のうちをそうひまたれがあ

とゝのおもひすゝも見申くちからをつくさるもじく
志のみたゝ笑と揃ふうで申へならずまことふ花魁
のそこし根ありて源と紙して楽の楽欲ありしと
いつとも身ぐる獣静しつ趣しをかぐあくちのかまへひ
かすてつやめて秋のこゝろ老をとやつたも皆あると
きろうするもうそる所寄しと見申して申まへば女のう
すらとまゝる縁より大盛もとくつぶうき女れたるを
起あしくすく継まる色まで秋の扉ひらうやへそ
りひつく待るうつのほしめぐおそろくるゝつ
十
むへよかどはしきく人ひたゝて
家名のほうてくしく起をまでしくふくしくゝのや

とりとよるが思へてし無常ある袖なれば人々のかたへやう
まだ往もしてるあやがけのふる月の名も一年とし
みしこやどるゆるそりしげりけなめしくきさらぎならう
禄とぶ水ちらをのふりくぐまさとするぬ庭のくさも
むおろきまうおぼ此こすひろのたちもおくしりぞうち
あろ涸房すともむしれたるくぼまううたなくうしむ
すうしとみゆまぜおなくのさくものひとつくしてぞみう
更すくうへのやもこのめつしくぐるすうぬ涸房
ところだくへとふだお栽のまみまくんのまなてすう
すた跳つきすきろぞみろあもくるしりどうとわひしぞ
もやをだなくへまむつまず文ばのき此ぞうりともなり

すんとそぞうちみくるる思ひかく犬りくるる家居ゐましてく
あやしき雨ちだをしうしくる迷後速大たる男のおうくの獲し
おまお鶏ぬきをしまとく縄とちくまりひろくど酒行う
みくどとひろぬさくしるだなふうるぶるしう人をぶよ役
ろ所むさろひのよるとくぐぞ後をあゝさしけつと
さしゆゐるお縁お後笑此おしまどお拔後のむしよ
ゆうろや縄とひろまちろくしげのたりしおりひふ
てしき行しをだ練や馬のむきのく池乃くるくそうり
けまとは縁しづるしまぞのそうすんとぺるのへけし
こうぞてありうしくしろどおほっしうだ逢はる
まとりくすろゆへうだ行りそん

神無月のはじめつかた時雨とおもしくおく山里に
たちよりける事侍りしにおちつもるこけの葉をふみ
まよひてすこしおくまりたる庵あり木たちいとふる
りたるをひのしつくなくして松をとゝすみ梅もし
わたるは筆のみちすきておほしくてゆかしうおもふ
人のおもかげするしゃくてしげうれけるこゝろ
ころなきかならずおもの庭よおもてなく障子のまた絵
をたくみずありさうぎまるとどけしくこゝひとし
しき子こしめらくまおもしろうえりう
おもしもなくとあやうし物語しくだりし
とも世のちうおきとゝとうしなりうひとさま

しうぎまりける人をおもろくゆかしくこれしかさし
わたしとむしひめるしはひとしあるおもうちやを
あらひみづやそとめし紙なげしよしとりひち
猶うらやましうたの歌も人くるゐそやむ
思ひなきあるひとくさうことぞうち
うらぶれくなくさまめと思へはけみおもずしぞ
つれくもやまとおもしろしのもしるそ大和のかし
ことりそん猶こうあらめさめやのむしなきまどう
うすくさる雨のおつまめ人なさくもしきや
ひとる煙のけしふみをひらけくおもの世の人と交
とまくうごろふなくさむほさなけそ文選の

わられすゝ書てし白氏文集老子のこゝし。南海談□
此国のもろこしをとのかきつ物ともかりすゝ人の心を〔?〕すゝ
しとおりくる
十四
和歌こそ物語し文物なれあやしかりつ山川
のおまさもひとつまそしおもしろくだてろし文句也
しくも物そのれ庵ぞとりくてし座にしくなおねば此の
吾をニおしくひとすへちとえ中ゆるにおまもとゝ
あつきこ家ともものやうおりてまそやこしくもののかみ詩
まうしぞ文おもゆるりてし曾をかゝ色ようる物もすれ
くまいくるきた今集の中に家くらとくやかひとつけへ
たまひとゝいまの世の人のはやをくりをもしみもし

さて世のうつりかはすゝ詞ひとひの□おかしけしいお
ようきりくとくりひとくられさらともかく源氏
物語はまそ物とさかしまうそりあくそ新あしまる詩を
拾州人歳のまきひしまとけくる家とそそげ世なるへ
こしよぞすこしぐくけぐるきくるもや又申らんさ
まとおのうるも宗議歟の時まうしえよしきて一ま
て縁すとふとかくのる盛し給下さまにくるよしむ
か目花まそうまつまおれゑのこびすし人へおつくうねか
とびつるしもわまやびさや今をしきをあへくつおもすし
詞家の作もまびしの人れつあくはかしよ物すし物よ
うくまそやまくすくやすまし、姿をしきをけけるのなれ

もゆくつ申源氏狭衣の郢曲をしらべまいらせん
まうしてハ花やかなれどもさしの人をだまくらかすおもひ
まくらさることもなくもとれのうしぐさこゆうすや
りつくまよわまだ去年にし橋さらざるうちがくむすび結
すれ共のをしびおうしくてあけ八井をうひそるあ
山里ならばいかやらめるれぬそのこそ、わやうく都へ
ゑみしめとつくづくやうも手をなき偏にさげけるか
なさうひやさしきがしけまさやうのあすかくさく
よろづよひつひをとぬきまおてゝ調度のまてたまへ
うい徒あそく々ごとおこれんくとつくまるそらだるし
こ申まゐぢ弦すこしの思ひてこゝもかるをおうし

まい 神楽ようおさめしく奏しあはれ也くずの葉の由を
琴ひちりきつゞみの音さまこそ琵琶和琴
も 山ちるよの秋にそのまく佛はつくまうちしうけまゐくせ
なくびのはこりもさるあくむちそれ
大 人そでぞのまに旅ほしまうやのかしおろゝくとしつゝうきく
賊とのこまゐ世とともさわしいのしうづいとつゝへつゆ若
よろづしとき人のどかくそやあれぬがあるうあしよ浮由
とういはく人をでぬしよ力すそくくぞらくつるの
くそ秋をとまずかしくみる菊くのこかけるとみくすり
ひさことうふぞの人のこゝろをすいそれもおる何事
の枕よのをもしけるが風ゝしかつまくするかけるくと

叩うのしゝくすてゝけびみるよむすひてそびものゝ
けうのうるびゝのうらぎそーうるたん孫長ろぎ月
よふとまおくてゝ一来ゆりうどゝよごれう
物ゝ物ゝるぎおさめろとろあーの人そゝとうゝ
と思ゝくゝうゝるゝくゝとくめくぎもつゝ人けめごれゝ
の人ゝゝうゝとゝゝゝ人のゝひ

九

おるゝゝのゝりゝくゝう物ゝとゝよ表なれゝのく
わゝれゝぎおゝうまうれゝど人ゝゝゝうめまゝゝうまゝ
きゝ物ゝくゝ今一ゝゝゝゝもゝたゝ物ゝゝのゝゝ
よゝゝあめまゝ島のゝゝたゝゝのゝよゝゝめたて
おゝやゝうゝばゝゝよゝきゝみの巻よゝのゝいゝうゝゝり

やゝもむゝくゝ霜ゝゝゝて花もつゝくゝゝよゝゝ
かゝとゝゝあまゝたゝゝもゝ風ゝゝつゝくゝゝあゝて
しくゝゝりゝもゝまゝ氣ゝよゝたゝゆくまゝてゝゝゝゝたく
ひゝとのゝゝゝゝりやゝゝゝゝ揺ゝゝゝゝゝゝゝ
海入ゝゝひゝゝゝゝゝゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
たゝゝゝくゝゝゝゝくゝゝゝたゝゝおゝ清佛のゝ
まゝりのゝゝ巻ゝの揺ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ世のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

あるゝ家よりのぞくやうのぎろくをえらぶやうにぬ
きあらはされるうぢたち月桜又おくりぜりもろ
こうるあめうりけまづうくあぶるうかどうと
うたくさくさ法華経のトト経をつくりかどづけと思うとかも
なぐやちやつめくさくさでおのこうとうぢ帰
えのあしこうだうたれのひけくくれてごれ酒
物張松ちやうなくふとりまておうすくこと
又今ものくよびもくとうとおりくさるのびし
ぬを脇のくさくさなれもまよまを作ぐおちうえ
なたをひくくうろをつ和さなれもぐ氏
みうくへえりとあくよぐそくそおりまのびたくそおよ

ゑぐおくくをくくまくくれけのまよりみちのちり
とくまるとてあいとあろふをまうあぐるつ水ちり塩
のふくうおくけまで年のくれくそぐくくよびそ
さあくくおそ又なくえなうぐさまれ和ゑて
ろくくのるえ月れ今けくまあくぐ世日あちりの宮
くうびけそき和なれ紙りるおの使ふうすくそ
ゑくよやしくくるえ今まくとくけくくむのうれよ
ろまうくくひてのよりおくりうくさまそいくくや
長儀ろる堂方新しけくくくそぐおりくろれづくも
つの鶯いくうくくれよおくくをやのくく桜まをく
おちくぐくくのつくえぐりくとあのくをくなるをう

あらんかぎりのつくすべきことをつくしてふ
つぎのくるまでのそうこよりはるかにくだりわらこうぎ
おろしをぴほそけれげたんのぐろ乗とくぎまつる
きさきぴこころあるやるそ紙おつまものうくよりおれ
きくことをきくおつるこうぎるりーうがくてぬれ
ゆのたーえぴるよのくりんるとそづくこねこひよく
ゆうーさあーらうきもつ大路のさ海松くわう
て瓶やうぎまーひけすくうづあうれなき

たるのーやうやうひーせすくんのひ世のたーま
たーふぎるまくゆのうあのくそれすーそいひー
ーうまこーとおめきぎほくらんけき

ーうけのこーそけみくまこそけくさひ物なれあくう
の月ゆのおすーろよ和ハあーーとうひーまよそくう
ゆまこーうわれるまとあーうひーこうけるーけまけ
ーうけんまひふうるけ月あきれーけ月
まのたーえこそけとーもうるまけ東海日東
東海志藝人のみくよどくもうこーとおけきひわく
りくーけくとづくけーこそけるりーの藝家よ山海よ
あうひくけ重鳥とうれてむさのーむとうくんけ
水草さうえ和まけ海ひあうきくうのむなく
ーうまこーとハあーー

何事も移りかはる世のならひぞかし今やうは八重下
まつやしくうだちゆくめれば木きれ地のよくみえ
のづくれぐつくしまがりて掏もた代の深きこそお
かしと見えゆきこ文のきこしたまいそ昔のかうこうまい
かうし見だくりふ気楽も日たしうこうだけわのく
ゆくなれば人を車のうきよ比へりけること
のひしと今やうの人をとく扱いぞかれおもしろう
上役家人数えくとりよへ表紙ちらありしぞろく
きよしりひ宗旨の読書を勝誨の法衰ずる所なりとそれ法のうつ
ろとこそりふてとうろいりふばたしそゆりきこへて
侍らまし

ねたうろへてうろ未の世ともいへど鎬丸室の神さびひさ
あるき海こうぞつらどを少くさき掏なれ露臺れあさ
うま遣にゐ夜けいすいとをぞけうしとどぎさゆへしおやし
の頭こをおうかへまよ小節に小板叢ろやうとたくもつ
めくさくまうぎさゆま坪るし表のまかけぞきうとふ
まうかりしけま遣にお表くのねとしのとせうひとのしとうよ
なとりふ文めくさしよそつの坪りまるく竿おこるへう
ありにさしなるき法目の下人ともみをさしうふよな
まさうもたしかぞりさむき表りをうしあくうし
こふ縁みりぬうてえれたしたれ肉絆家の法於にお著
きぬくさく浅なけら掏すりとそ酒大るつぶん数大法

をおほせられけり

廿四

斎宮女御はよにおはしましておはさ瀬にやさしく
おはしけるかみのうちにもかたはらにのみ経をよみ給ひ
つゝこそ深く帰依ありけるもおはしまして色こく
神の社やうやうにえらびたまひて文殊をはなちや楊
かゆふ葉の花しをもおこすかねはおもかけなく
しくはしきふゆのきさらきなとくに心もねうるを
おもひはなれしきさき伊勢の斎宮の日平野住吉
三輪　貴布禰　吉田　大原野　松尾　梅宮

廿五

賀茂川の御瀬にてすゝぬ世のあはれも時にうつり
ありさまうたたぬしきかなしひゆきのひて花やかなるに

めつらしきものにこそかくもあるかなとてんとあ
らそはるゝ桃李梅のわかしき誰とかはりけれとも
かならしもおもしろく見えけんもやりとなるを蓬生の
のこそはとそろなりけりみな緑にちる事をみることも
とくかへつこし簾をまきける海をあはれなる峨雲
夜の絶えみのを行かくし庭園おもくむきのれ家法
そうのこゝ清水の流うしろに世のうくあはれなる宋
まるくとおもひしたき時はのうもん世するものなるを
あはれなしとてなはしてんやむべ代合雲なしくちう
くまなくおもふやしる和の法南の門をやまさね金
雲もてこそ坂たち進の中しつゝありてしとなささう

わざもなし無量寿院ばかりぞそのかたちとてのこり
たる丈六の佛九体いとたふとくてならびおはし
ます行成大納言の額兼行がかける扉あざ
やかにみゆるぞあはれなる法華堂なども猶侍る
めり是も又いつまでかあらんかばかりの名残だになき
所々はおのづからあやしき礎ばかりのこるもあれどさだ
かにしれる人もなしされば万に見ざらん世
までを思ひをきてんこそはかなかるべけれ

廿六

風も吹あへずうつろふ人の心の花になれにし年
月を思へばあはれときゝしことの葉ごとにわすれぬ物から我世の
外になりゆくならひこそなき人の別
よりもまさりてかなしき物なれされば白き糸
の染まんことをかなしび路のちまたのわかれん
ことをなげく人もありけんかし堀川院の百首の歌
の中に

むかし見し妹が墻根はあれにけり
つばなまじりのすみれのみして

さびしきけしきさる事侍りけん

廿七

御国ゆづりの節会おこなはれて剣璽内侍所わ
たしたてまつらるゝほどこそかぎりなう心ぼそけれ新
院のおりゐさせ給ひての春よませ給ひけるとかや
とのもりのとものみやつこよそにしてはらはぬ

庭うゑそめおくこの世のことのはもたまこの流れのうへにあつまる人もうたてさびしき世なりけり
散ぬるそ人の心もあらんれめくよ
涼風の手ひとつ吹なれぬ事ハあらしのいろの西ハ乃
海なとの松原とさしあつ一の西の海とうきくるよ
きうつあつ一つ一つ調度ともをつうつ
三人のかうそく大力手綱もくる美物をそゆしよ
九つうよ思くこゝろ川よ色すゝうの意一さのこ
うをんくるた人きつまるくはかう武蔵のす
きひよなくとなくハ人をそくとうきくめはをう
しを思かうこすやうきつゆよるた人の
なたくひこうたすきひこうたくさうたくこ
おちるのあくちすれひはあくうくおくく
つくいつなくおるいつの年すりんとなよい表
なるそうをなれをうくなもひりふくそう
らひひさきいやうあ
人のなたはりのすりきりすり中陰の祖山墨か
とふうろひて後あをををよおうくうひね
て後のうきとをくうくひあくくかあの
きやくきくやくそあもにあくくの日をとかさ
けおうありひよいつるりかくあ我一こけよあひよ
きくめちりくくあゆきちかのをこうよう

まことぞ仏のおしへ給ふ事にはあらずとなん よしなく
しの事にあらずしては道のためにもなからん捨し
なけれくちこそのしうちのうたふ行かしもの人の心は。
おもふこくおもひ出年月へてもわするまじきは
あはれさることのそのまゝみえしとりへぐる也。
あはれなるとぞなかしけるへおぼえぬ事やうの
こゝろあくがるゝもひとへにひきたへけりと此山中
はおとめてしづかなる人さ昔のいまうして遠くみまゆるはなと
なくやちかき苔むしぬる求䂓かりうつして其嵐
東の月のそそぐごとく海のもとなりけり思ひいでて
志なき人おもひしてこそおもひもとるあとなく

てやつかうかゝのずらくもあはれとやおもひ
さるき後とかすきもしてゆくまいつまの人とおもふ
たまへらむ年への其の草をみてそびあしくかの
とみる人さ浪たちくは嵐ふきおしかもかすみ
まてく影はくなる事かるたつるをすゝれて雨と
うらめぬさうくはなくるかゆるさうや思一度
雪のおもしろく海ともし胡人のうたかしく事
あるくものとやらしく雪のこしぐれふかく
ものすはば山宮のかみるゝ一筆は送りかきぬほしき
のひとしく人のゆくらおもき事をかくるゝ人さうに
おもひ口おしきば心ななどとうひらくもかたし

十三

九月廿日のひぐらし

[illegible]

十四

今の関白づくり出さまゝ[illegible]

[illegible]

十五

[illegible]

十六

甲書[illegible]

五十六
まのあたりきくにつけてもこうたちこひそう
ていそうしてそこのようめもとうはうの
五十六
くへくるまつきぬはいうりうどうしらんと我をとの
思ひしられくるに楽る死ひとをもよおのあるこ
仕事やあるひとなにびおこをてろしそこうこ
ゆこうまてのまだいろいろ海ーーろ人をそこれどこの
ーーいろうこいをあるくきまうう
五十七
角多へてくるれるこの人のどをあるけどまよひ
をえびひをつくろくさ海よみゆうこうがいろうや
きなこいの人をどる我のふくーく
ようの人のふとそおうゆうこうの人のうちをこう

五十八
名利よばうられてあつうるうばとまふくこ生我
くろーむろこそをろうなれ賊おいけまもが為を
まのうよまうこ宮をうひかくまひくだうこうや
為の後よ金をくおや我ふくみをもくへた
めこそまうへうへきをろうろ人の見をろこと
むうだのーこ又あうきーだなう車おこくこう
金をうこうをひあうこ人をこくをうう
ちそこうへきを山まくおいはよなくへし
おまこへはをれてをうろ人なのうつまま
ぬるをうこの世よおきこうおうまりーうへれ

位ならぐやんごとなきそこなれども人とやはらぐ
和てそだをろうよづくる人も家よまれぬべきなく
ものをえ人位よのかつまおこうとどきうひるもあのびこ
うるもし賢人生人ぐうつしうやしうえ位よをあぬと
あこをしくやこめろゑおかしびとくてだうえつ
うさ位とのそむもゆよをろうやぬ当面とむとそ
世よをそんるうがまれもゆさまりをえゆづく
思へしうまをと生をるまそ人のをえゆろこあや
かむる人をうろ人をとみゆ世よとくまをすづくえ
うし人みくすをやうよぎろくしゆ位ところ位よ
うをうまをしくとゆうをんうまれはえうるものを

なりゆ物の原乃ゆゑはりくゆ位ゆうる当あり是とねうの
もゆよをろうやゆ〜をゆ并くゆ位りをめ当とね
うう人乃ためよゆくゆ当面位くを当面出くをゆつるあゆ
紙をゆ相の場ををろうゆづくをくゆをひてを
ゆハゆをれ当よあうしゆつなろゆ当とうつくよ
可ゆのをゆ偏やゆうをうゆ善とうゆまをの
人をゆ当りゆくゆ位りゆ功りゆくゆりあゆ位う
をりゆをれうつをうし是位とをくゆ正をまのうをゆ
うをゆやうる当受正得失のりつひよをくれりや
ものひとゆりくゆ利乃要とゆくゆ山ろゆづく
のをゆ第ゆハ当相ゆりゆづくをくゆをゆよ

たゝるを
我人法然上人よ。念佛の時。臨終よをうきれて彷徨
こゝらを作る事ゞゝくあのゆゝるとやあゝら
ひどゝやりけまてゞ目の前めてゝ名仏し彷徨
とゞこゝへられるとゝたゝるとゝつとゝゝゞ法生
まゝ二定とおゝへて一定不定と思てゞ不定とやゝ
ゝとれゝゝゞ見もゝゝとゝゞまゝこゝゝひなゝゝも。
念佛すまてゞは生まゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

月情國よ何のゝゝとゝやゞゝゝゝゝゝゝ
ゝゝとゝてゞゝあゝゞゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝめゝゝ雲とのゝゝゝゝゝゝゝゝ

くゝゝゝけまてゞゝゝとやゝのゝれゝよみ西へゝゝよ。
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
又月出日。ゝゝ義のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
雜人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

思ひしまゝにふけまくうせにしの恋の恋の事ゆへ今ゝのやあゝどうまとゝ言ゝ物ゝて日紙くしひとゝろうなる事ハ世況きしひろ物ゝとゝぴひまとおろうん

とゝ微ゝきおうろのそれ世をろうゝとゝいひて當

うゝとゝそうゝつゝてあゝんいゝをのゝくゝ西ゝきゝう

てゝひゝ物ゝろ況ゝうゝとゝのゝゝゝゝ推ゝうゝ物ゝひよ

らゝゝんなゝゝとゝおゝゝゝゝ思ひゝをゝひゝちゝゝくゝひゝ

ゝあゝゝのゝうゝゝやゝゝ未ゝひゝゝゝあゝゝねゝゝゝゝゝゝとゝゝて

物ゝよ惑ゝゝう事ゝなゝゝよゝあゝゝゝと

四十二

唐橋中將ゝという人のゝゝゝゝゝゝ

たろ見ぬさきにうつくしき紙ぬりつくられたる箱の
うつくしきをもてあそびつゝ
ぬきたるものをたてまつるとて
町ちかくなりぬるおとこの年廿ばかりなるが
たまたまひとくるのとやうなるさまにて
みとりのひろきにぬるゝ
孫さうまうり
おやこの行ひうちやのうちにて
家ぬしのおひさうなるねとぬやうなる
きぬ〳〵めいとゆへつゝきぬ
をひとりとゞまりてさらの
ゆうんぬるまりにて
めやこて山のきしよ
てくるに車のゆるをつひ
下人ようくしくのうち
仏事なとさうぬやう
とゝさうのうちに
白ひもかすむ
如来の
つのひゝるゝ

稲荷の森のもとにちつ
きゝひゝくゝ
ゆうんぬるまりにて
めやこて山のきしよ
てくるに車のゆるをつひ
下人ようくしくのうち
仏事なとさうぬやう
とゝさうのうちに
白ひもかすむ
如来の
つのひゝるゝ

あやうきあのようつりれてむしのものとうまくやう
水のをとやのるわ弟入やうをうをやらのはまま
をやこえひちちく月のをれをりを申。宝ものを
四六 えんよ 国院ゝ歩ゝ宿し賓龍ゝ子
ひ世れ二位のきうとふ。良を僧ゐとやををうをさを
めく。服あ〜ゑ人やたり。坊のをうをふ。なを。接
のまうあのをれを。人。接のまれ僧ゐとをひりをひ
ゐ。絵まへの〜をとを。ゐをまをれまをひを。振のをけ
まを。ををしく井の僧ゐ。といひををらをくを〜〜ら
て。をををく井を。法をくふまのまを。迎ゐををる
四七 法をくまをけまを。法池僧ゐををひりを
柳。面の色を。法僧法。法市。ををを僧あををを。
法僧をを。あひりををゆへよさりりををりをを
四八 を人。法状へ。あをををふ。を。是れ。をうまをひをを
ゐを。をを〜〜。ゐめく。ゐをいひりくゆをれを。是ゐあ。
ゐをまを。ゐくをの法をを。ひけまををいへもをひ。
ゐりひやまをひけをく。を。をををまをを。うら脇をら
て。やくをふひをを。呼りくまを〜をををねを。をををるわを
ヤをを。やを〜まひを。のひをのひえの山よ。申をまくゐをを
まを。ゐ〜今りやをふひのをひをを。をくを〜をを。
をうひをりををを。ゐを〜。ゐをりをを。
四九 法を西乱
出を。絵つ。法をの。を。勝僧。を。ま。ゐ。ゐ。ひりを。ゐ。
ゐをうをれて。ゐ。ゐ。ゐくを。ゐれをゐをを。ゐをひ

実ハ少ノ頃ニ
待友来始莫子
迄石墳多
是大年人

ちゝ〻〻ぷいうきゝ〻とみとのゆへ〻ゆ〻〻〻ぬ〻〻〻
なるもゝ。ゆ〻あゆ〻きゝ〻ゆ〻れ。祖よとれとゝくうゝ〻ゆ〻ゆ〻
ゆ〻れゝ。ゆ〻ゆ〻識のゆゝゆ〻ゆ〻ゆ〻

川の人民つゝみをきづき西国ちゝ
たるまゝぞみちをひらくさらうくしゞとゝろぞくくよりて
いひあつまりまきくゞろどいつ人となく貴こく
いつ人りあゝゞ上下名ゝこのごひやゝひきて
法華山より安楽院へまうひ給しよりあつまりこゝさ
まの人皆ゆくとゆくくゞたくゞ 条宮町ゝゞ名あり。
のくつまあくつまで今出川のなとのとるゞくやまゞ院の
法橋義のはゝしのあつよと張つまう人うもあくもゞ五あと
たりづやく迫ゞ犯ゝとゝゞあくゝゞとゝ名
つまくゞゞとゝりゞ犯ゝりゞくゝゞのなくゞゞくゝ。
ゆく五ゆくゝくゝそゝ開浄おゝくゞゆゝくゝる

五十二

ゝゝゞつゝたりゞゞく法ゞゝるくゞ二百ゞ人のゝうくゝ毎事。
ゆくゝそゞの名乃ゞゝゝ人ゞゆくゝゞゝゝゝゞゝゝゝゝ
ゝつゝゝとゝゝ人ゞゆくゝゝ

亀山殿乃西池ゞ大井川乃水ゝゝゝゝゝゝゝゝ
大井の古民ゝゆくゞ水車張作くゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝのゝくゝとゝゝて毎日ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゞゞくゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝくゞゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

きのまぶやしくしるるだそのひなり
仁和寺のあるじ法師、年ごろもまくごの清水をがうさ
ずりのまゐじゐうくおぼえそおぼつる時思ひたちくぐめる
ひとりぐらうまのつくをたぐ徒歩もるるおもひをがく
てぐくうもとびめそぐくつまたびのくくくくのくう
あひて年ごろ思ひおもふ事をこそ行うぐこ
まもるくだうとくくうぐおくくけまうを給うくう
人くよ山のかつらをばけるのあのうんゆーいを
うく祈へさぐうくがいおまとおりひてじゆまくいみす
とそびひりぐまこのるまをいぐうまりまよ
うまるる

五十四

是も仁和寺の法師、老の法師、ぶうしとすうびあ
とくぐあうくゆるびうをけうよ酔くく奥よへあうわぐく
つくなうばーうるへとうもくぐ戒よううえうまへづ
たやうよもうのむる紙をひうめくぐうとさく
いまくく葉出くうみ満注奥よいうまーぐうをあ
もーのぶてくく後やうしとまもくひたりどくくすまこし
くくきめくぐくくはうんやうしうぐ雅よだれとうそぐさ
くひのまくこのうきくく奥
もつまうこのまこぐうくうとすれやだやをくつはと
ひくさくぐへくうるたれどうふくすへくやうばく
てぐこあーなうばのくうへよぐくひくどうをく。

ものとひよ枝をつくり京すうくをーのうるおぶて物
ぐるぐるもくーくんのあやーーみくーとぐきもあーーぶ茶碗
ものとぶーーいくーくむりひるくひたしぶのさ海ごこ
ぐーくやうるのひあ掛といつもぐくをいぶーをいよひく
くくぐきあくまぐくくくとくとぐみくもくとくとぐくくぐ
をくくのあーーとくくーズ仁和ちくん海くぶぐーをきを。
老くくあ毋なーぐ掛くくふぐくくぬくぐぶ犯くあーーめ。
くくくくくくとぐ掛ぐくくくくぐくくくくくくくくくやう。
たくひ耳ーをかくくぶ。くまくくくくくくと命くくのいたくく
いきくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
をくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

よみくくをのをくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

五十五かぜ宮ーのびみーーー天明くのくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

ゆるすべひとろひくづつこけらぶのの
りとよむきくゆ数珠をすりぶやとくくしくぶすひ
出なくくづなくうろまひてゆ家がどうにのきて
まとぶやくゆもつとうとぶのうひうやくく。
ゆゆぬゆりかく山とゆきまてもだりいるどうつこけろ
どんのうとときくぶ所へうのうまうゆるとううり
ゆゆぶ時ととどうのてなてぶまくづうひうう
うくづんまよびおまわよ奥あしとすうとぶ
ゆゆうるゆとのなるる
家のまちやうぶるとむねとをんしみとうつなけるゆ
うとをうぶうつうさぶまろ人行ゆぶんくうまゆとう

ゆるすぶ水をずすしけるぶあさうてなれうくうよ
ゆうしまうなろ物をみくゆ登うを戸へ部のうまり
をあくしてゆ井のくうくにゆぶきくゆ地くくしさ飛な
用ゆ所ゆとうくりくうくみうゆりくくろ所の男
うゆゆうくうとうぶんのけくめゆひ作
久しくくまうく義さうん氏家ゆよゆうとうくうゆ
ゆくくゆゆりなくくうゆ所くうくうくうのゆまてう
てなくうれゆうん人をぶくくみうぶとうのくの
ぬうぶけえさまのんをぶうんよぶけくゆぶけう
ゆうくうゆとくくけうきもうえゆくくうゆ奥まううぶ
うゆんのゆ地くうりまうゆんゆまてけひくよ

ひきくうつくしきものつくりてこれをきくるあれどうらぬ
人をば誰ともなくおもまつのなかにうちあくみるる
のやうにおぼゆるまもきをこれはるるしづひのしるし
いとらうたくしきりどいひくもおぼくけうをぬ
よけうるたしくといひくもおぼくこれらふるそこのそと
ちう所をあくよくのみさ海ぐらあしはもあるうん
えぐうのことるやさくあくるこをのうあうしひう
うきくぶひとさくぶいとまひ

五十八

人のうちのくぶうはるこのおれるうちうが
いみけきをこうをえをちくんをいとーと思ひくを
うくーまくぶとうもちあるこのあるうーあくこ

五十九

道心あること信西すこしをすくーー家よりうくーあー
そくくとも俗世を捨てうちんあくうくんきくをといひそ
ぬくーよ俗世ちくぬくんなりけりとそ世とくるかこか
ちくすを生死といくんと思ちんぶ行北奥あるくくる
物々をもてはくくん家をうくんをみくぶとるこのぶくきあー
うくんぶをを張まひうまくくうくをのなれでおるるー
ちぶ道ハ彩しくくーぶそうたくそ拙ぶくーれくよみくを
山持まのくくも縁とたをけ貧とのをくーもうなくて
ちぶあくーまあるきなれをのくくー世とひさくるよ
いくくくくるたくるまよりまくをなくるくくんぶを

てごひりくうひすーぬるのけーへあーのいおさくし
たくうくんそ。ゑ下のるすまぬもうお一ゑみらよ
ぬくぬとくてくん人くとひ望おくいとくしいさくひあろ
人の金強おくそよびろつくくもい紙の金。あさの和泉
のまのきぬろぎのあつ拍いくくもくの人れつくどなさて
りくむろ布ゑそやみくぬそひりやくぬたるめくし新ゑすし
ぬろ布もあ連もいぬそいくて。ゑ下ゑそくくゑ下ゑまきちの
つくどくのくろ。おくそ丸人とむまれくくんどるーゑすゑ
いくるのーくぬくとのくれくんぬくうやくまりけ連。
ゑくくよむくりくゑ申をつくゑてどくくーきりむくさくん
ゑどくいのちくおくいよくゑ布やくまくや

大事成思ひくくん人くゑくくくむまのくくらんくし
のぬいくとをぎずくくさなくくまつゑてよゑちりくむす
をてくおるーくゑ坂事くくをきくくーくくれて
と人の帝やあくん約未紙なくどくめまのけくくを
くろおゑ連くくそあれくそくくまくんどくあくーぬさん
くくくぬやうよなて思をくんまゑくくきくぬくくのこ伊
くくくくゑくくのつくくどきくりおくく思ひちはも
あくん人くくまおくやうどくくくくくみくくおくくーむあくゑくて
苦ひあくまくくゑくでくゑおゑくくめくちくきくゑくす
まおくくくん人ゑちくくくくやいぬ分をたすをくんくすれね
砌くゑくくん人くくくくくくどくを賊くくくくをくくのくれくくくくく

きゝ人とまんの和のそい無常のさゝろこゝ水火氏をむ
ふうるもも重ゝおろんくゝ和くゝ時むゝろ歌ゝて
きるゝてゝおゝ氏悲人の情ゝ拝ゝゝゝ拝さゝんや
左
人参ゝ盛親後部ゝくゝやんゝるゝ出者あるも
ゝゝのゝゝゝゝゝゝ和ゝゝゝゝゝゝ

書学生毎況人ゝよまくまくに家の況姿なまそち中
まもぞりく思つれらまけまとゆ世とろろ思ひそろく
せそのまくぐろろ川自世ろくくたくくよまるのみと
いつこと多ゝ出仕しくく餐膳なくおづくゆもぞろ人
のおすへまくまく紙まくもぞりっおよすくゆれなやらく
ひもしうらくひく海のたれそひくの浜いるらてゆ
きそりそれ旭ゆもぞくまひまくくねりひづくく
ひくれ時歌なくるもくひでねみくひまは書
そりきこりまくいつなりった事わまくもぞくのくる。
きくいまもぞ月山あるまもぞくゆ我ないひもそとすす
まりくうそふまあらさなくものつひなくゆぞ海ゆれ

ともぞくいとうれまぞまろ汗ゆくきれろ酒ろいくねるまぞ
ねすや

六十二 近産の時あり人れとまるまそまわろまりまるまわ
らん近脆安とぞこりろ時のまりるひやぞくこりくを
ぬりひまぞまるまりだドさ海くしぞとおこるまくぞをくかえ
祝あり大為のまもれぞりまくを紙めもくなりみろ死寿し続
の猫おいめりまくくのぞまくまるよりまる我れもく

六十三 たくまりれくまも
延改いれぞいとまりくぞだりまりけりみ拾へまりれ
人まれまくまくまくまくそやまをみひくまるまの
まりまりまりまりのまりぞまくまりぞゆくこれ

とそ。まいらせおうゆうごこいしくぐるさのつをゆ
文盃 後七日の酒宴茂孝くとうつひくとうとりや遣人
よおひにきくくらむ夜遣人くくくくくくくくくく成
にたらず年のわそひ酒中のおりき海よこうづえ海
かまをひたるものと用むをやうあ〜ぬごとや
古今 車の文結そ文人よう〜すがとつまくきくし
ひらぶのうき海よづくりわまをのくのやとそうあ
人おをきうれ
京六 ひはの冠を着うまきうよさく成くらかたこ
代の冠捕をおりくち人ばくこうきくく今八月ら
文七 器おやうあ百夜ゆのなこわ梅の枝よ島一ゆとうへて

ひくくうづきくくきつくくきへきくしば雪の朝ひ毛野
茂勝ふ海られらもけうふよ花よ島つくくよ〜ばうと
きくうひ〜くくよおうくうひくくくくくくもおもいはし
すくやけまをば勝郎ふおぬくくづくくよどくく雪
ぬくくえ茂勝よおりくくぞのれり巡りやうよづる
てざのくくをくくば海られらけまをば梅りかえ梅乃
くくくよびとつとけきくくざのくくをりの茂勝りやい
くくば葉のえくく梅乃梅づかくくくどりくくよ
つくくえ茂なくくくくくつくくくくくくくく

あるときたちばなのこまきをおくくく

いひらまーこそいみ〜しくだぼえてーのが今世川隆
をもかとくく業とそしおあまるみるる人まがくるたる
めがつよりこ白らこのうくとまそでのみるつの花はが
のがるくく書そでよめうこの穂そが減よやんこくそ交
うまれあるくくく人の口はあるこのおりー低又詞
庶ーなどいこくがくくくくくるる
六十九 鈴紙ーどるかのーの押部徒そどみやこうるこの
れるけるうのがおが詠どるつ川ぶうこ公茅とて
勉こくおがるつはくやこく食けるこ年ーくく
こりわ老味鈴のうらよ人もなるるひまとるる
るくく敵をそひこくるるみぎめけるる鈴の

ょ若二人出くく貧とけーまそ義ひくく岩を也ーく
るるいくく思機はおるくくばるるがくよ掲ーのみ
えわくくのくくあるうひーのみそがるる人そびひ
けをが年業なのそおがきおくがーるがおるひるる
はこくみくいるひくくがきをよるのるくく低とるーれ
たがくる低もおるとばるるーこて
十 書写のよ人ちが花債誦の頃るとそが根泡はのが
るくる人やけくが掲のるるやよちくくけるこのこの
うくとたこくがめそにるるこのづくくとるるくと
こくこのなれそがくくくめがそのれくくもがるめーはく我
をそがくくがくためくみとるる地のおがるひたるそるる

三十六

新くまのうしのごとくくとぎりこをとりてかくひとり
きくきしのそこ屋のうへにまつうつりの法ろこけまとりぬ
うたことやのくれうとこのひうとそぶのこりく

七十一 元慶の清暑堂の御遊に参よりまゐりをすゝめ給ふ
大臣牧馬を献ぜ給ふ

ちれるけまをびとつおちよたゆ所みてくろうよう
いとどうのひとうくぶけくれまけまを林代のさ
りてくぶくひくぐゝゆへなりうどいうすき題の
きにけん酒はまるをぬうつきのどうくぐふちくぐうの
やうをかちるけりくとそ

七十二 ものとあるうどやうくく面新ををくまくぶちすう

をみうけをそうしてをひつうまくひかをうへそ
うけき若酒酒をうくてくとぶ法の人は家のうくをと
くくそあつをうしとおほをぶとをみうへの中よをひ
ようへうあくを雅もうくおかゆうやゑいうなるわ
うをしへのいふうを見ふゑゆる酒もうをひのうち
をうくくとはうつうやあうをくとををていつくを
思ひいうくねうをあをくくうりくちのすうをやき
ううをくくなうや

七十三 いやくきけうをあぬうくあくをひよ調度のおけをえ
筆のおうをを指仏業をの仏のあをきをの義をの筆
あはをいうをよをうをうをを経のおうをえへまあひく

御のおうきさ永えいの絶景野ういく。書のをうとおおく
てぞみるしるしるべ。をえ久東の乃文蒙昧のちり
世よりうつさみつること。誠をあいるたよやおろくを
これ虚こなりとおうとをもてく。人やはとうひなとう。
まいく。年月すたぬりひもてくをれこぞひたた
ゆくうぞかうまなしく。絵ることうたくあめまいやて
ゆくまちをめみちくの物はよ上をのぞこうさ事をうて。
ゆくうくうくう

人氏はくるとき耳にはさみ[illegible]
あ[illegible]ぞうとおくるもの[illegible]紙神の幸物
格式の俗記のこと法せうる人きこゝもあるまゝ
世俗乃虚らとゝ[illegible]法[illegible]おこうあ[illegible]
あ[illegible]なといつもぞしてるけまてたくはまとゝくあ
ひらひく俗と法をひ又ゝゝうひあさけつてゝくひ

一五

幾のゝくゝあつまるゝ京西のうに面わゝ[illegible]
るゝ式ありいやゝ式あり者ゝあの紙面あ
ゝ俗ゝ家あゝゝ[illegible]ゝおゝたくゝとゝむあるお
ゝゝやゝ[illegible]ゝとむさかゝ利とゝゝゝ盛むけすゝ力
ゝ[illegible]ゝひくゝ俗ゝとうまゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

花とかあつゝゝゝゝゝゝゝゝ[illegible]ゝゝゝ[illegible]
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

あんぜう事にさくまれらこと多しぶんぶみちのよおうそ。
得失やしはする。酒くひのよ。ろうと。醉の中うう。
爲ぶんをとりつくるぶまくやとれらる事。
人これうこのこと。ぶつまう誠ろうをとぶ。もとも。
とこうれてかを宗。事ふ新。ふすこむ。
まくきんこ。ぶつくこうたの。むとこいひへにれ。話
人事。役論学問あの。張張とやめてこう。書ふ四親
ゴ之猶き

十七

世のおぼこ。共やうすろあこうこ。新きも恢とあのくへ
共くゆふとふこあ中ゴとを作師のぼ。こ。
いひへてまこうこ。ぶつ千とやこうへゆきぶる人へよ

あのあとこと作師ぶへよくそあるこるん。世中ふ。
こそ。人のりくあつうひくるまぶへま
ゴこあこあ人ろくあ業間ありて人ゴもあひきこ。
とひここここぶきまひとあこ。ぶとこあ重
作師なくそ世れ人のへこぶこと。ろこ。ぶこく
ここひぶりしとゴそゆこまこそひちこすあこ

十八

今やうの事ともものつこ。紙ひ日ふめこくふ
まこそ。又うきられ。世ゴとふここ。ぶこ
人ふひこ。今之れ人たこのあこ。あとよ。
ひつきこ。ぶこくこ。酒のふこ。ひゆここ。ぶこ
ちこ。ぶひこ。月こあしをぶこひここ。ぶら

ぬ人よりひゆも思ひもよらぬ人のうか
らひある事なり

七十九

何事にぞくらねさまあ〳〵ろそこに武人たち
たるこゝにてさのこゝろかうかうやきいかつて田舎こゝ
ろ所のあるこゝろにぞ思ひもよらぬ世よりつゝ
いくさすれさまこゝ世よりつゝ武ぎ
うもいみゝと思へうにはかくるかうくわえさへ
たるみちにてをゆくちにおもくぶこゝろきひまいつゝ
いこゝひまい

八十

人〳〵よかあるようこゝ武ぎとのこゝそあのめつ法師ゆ
恋のうらとこゝにぶひまこゝろ思ひくすへきこゝ

つまゝうこゝ武ぎうくし運ぎ一般ぎとぞ一なこあへつまさ
まこゝをろうこゝをのまこのるこゝうまぶ武ぎ人よ思ひわか
つれゆへし

八十一

法師のこゝすをあ〳〵す上達部殿上人ぞこゝ面もうく。
をこゝるへこゝい武ぎとあのむ人あこゝるこゝ百こゝひ義て面り
たひ勝ちこゝぶまこゝ武ぎ勇のひとこゝ宮こゝぞゆへ
運よ家こゝくわこゝ武ぎくくゆ勇者こゝあこゝすこゝ
人こゝ恋ぎ武ぎ武ぎ人こゝ
ぞ死ぎとやまこゝて婚ぎくこゝうこゝ人まこゝ
いきこゝ祖ぎ武ぎこゝうこゝ人編ぎと武ぎ
敬こゝ武ぎ拙ぎ家ぎ祇ぎ姫ぎ

八十二 屏風障子なとの破もうつくしく第やう
しくうたさるうつくすたうたることを家のあるしはつと
かくはゆるやだうぐりくう調度くもしをうも
をくおくことをあわくしさのこうたはをはくしと
すもあくすは換をはくしたためとくおなくみうくいき
さ屋よをうくめくしうくしとそし用うたとくもをた
うくうくうくおのこなをうとうつやゆうめくうやう
くくくく

みのくこうつまろ。だいきんなれともめつらしけなる一上
まくやこうすんとくく。ぶ家しる。ほよろ。洞院左大臣
ゑ。ひまと。ゑ。ひ。しるく。桐園乃ちまろ。だうをさわろと。
元藤の梅。ゆるとろやふふと。ゆろなり。月満くろう
ゆ。柏威。しくはたろ。ゆ。ろはのことされのつまり

八十五

法弟三義乃ろ。ゑ。ぎやうくゆつ乃義とみくはる
ひ。病ふふくはの食とわろひのきろくとさて
ゆろろの人は。ゑ下まそ。ひとゑ。氣文。ゑ。人の国
まくみゑ。折れと。人のひ。ひ。ゑ。弘勲僧部。後ろ
情わらけろ。三義りふとふ。ゑ。ふろ。ゑ。法師のやう

八十六

ゑ。ゑ。ゑ。ひまくゑ。ぶ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。
人のひ。まるふなゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。
をろつくゑ。ゑ。乃人。まろうなろくんをのまるふなく
神と。人の賢とみくゑくやゆゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。
ろうまくゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。
ひ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。
うをを。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。
まるひまくゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。
ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。
をを。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。
人のまゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。

まゆとくくんとうるさく直人や驚きまるふい弾のた
くひ巣とまるふも巣の枝なるぞつるてもぞ鳥と
まかもし花鳥とうふ
八十七
性絶中絶ふも風内のもよとめろくんや一生携をま
て横浦うらくちる法師入来伊織と同篇
く伯耆ろうぞ保ぞ二井ちやうまて一時活うまあひ
て法坊ちくぞ法師とくそや花まやちるハるけ巣
今ろるまてやろくくくんろやぞめとぞくれるのみて
秀句なりる上
八十八
下部ぞ浦のきまろ中ハ心まくくぞやろ字伊織
伯耆ろ行のこ巣くぞ具芸巣やくおさめくなろ遊世

八十九
八十
入伯とあくくくなりはけまくつのよやむつひりる秋時
室ぞ馬秋つくくくろなれもばろうなつぞとなつと
ロはくさのおれあぞ也一度きやぞとて魔とくて
たまくぞあうをくぞくとのこの矢力しやくくく。
うひくくけるまくく浦くくくて行
かとふ木陽入かとくく赤法師入来あるる
しくあひくくふ山男ぞろむうひて日暮まるの山
ゆやくきくぞやまるるくぞとうひくたかとぞひやゆた
けまくく人も落ぞ力めぞ矢きやくけるくぞ
そく巣くるとするくくうつしひなく酔くくるのう
ひまきくくゆるくゆるくとうひけまくをのく浦

てをぬぐ男。具足奉ありひくぞ坊主ぞ四やうき
ものもをはけるものをのりられるひとをまはらす。
をのりの仕りんとをとをとをぬあらしらぬるくす
はひはけるとくつるとてひとをきよきたと
けりさて山さちあのとのくつとけをまを雪人なこを
て出あくとわをこそ山さちをうひくそをつをく
つをけるさりまをひけりくとあまくくしてをおをを
あををくをちくりるとをるを血はをくを治大路の
まをくつをくりをはまくくてをあをくを
くくをを具足奉をくちをひみ
をるをとりをを出てりをりをくをうをけ食はをくく

八十九
或者ハ水ヲ出風入ヲ事ヲ知ル
ラン或人ハ此和歌ヲ事ヲハ知ラ
ヌ事ヲ知ル人ハ此和歌ヲ事ヲ
たりひはしをはをつをかくくそをといひのをををを人
をくそを世をありくをを猫をををををををををを極
をくくをを

九十
奥山よ猫をくをいををのをくをくをくをををを人
のをひをくをを山をくををををををををを猫のをををを
を孫ををををををくくをくをををををををををを
をををををををををををををををををををををををを

法師の物語の絵の色よりのけうとくてびんぼうの
うち方をぬしまへとゑらとかふうと思ひけるとしと成
ぬるまゝに夜ゝまゝくまを云しくぶるの酒けうて
かゝりのそうすで若ゝまゝ詠こまつあやまくも
あゝのうへとうるまゝくゝ屋ゝくゝたゝくまくて
くひのをとゝ成ぬるとうしとゝ肝心もうきくゝをうしやて
まうよかりのかくゝ色もうゝひかへてだをき
うのや詠こまつゝやくゝ山まへも家とうゝ松とと
とゝしてゝうまうのそうまそゝひまゝのみゝまうゝ
後なりあちりふとくゝ法のゆゝうをきおうゝこ
ゝうゝ連方のうをとけどうまくゝ弱小物すくゝ懐ゝ物

九十一

たつゝりうもゝ水ゝのうまあ帯ゝうすくゝゝみをうゝをうゝ
さ海すくゝゝふくゝ家ゝよのゝうゝりひけうゝ大ゝのゝくゝれ
とゝ月紙ゝうゝくゝ死ゝうゝ入ゝかゝうをけうゝゝそ
大納言法京のゝゝうゝひゝ鶏丸屋をゝ後ゝうゝのゝ
とゝうゝくゝうゝゝ月屋ゝひゝゝ我ゝ時ゝゝくゝゝうゝをゝゝ
を法京ゝうゝくゝ拾ゝうゝゝそとゝゝゝゝうゝはゝやをゝゝ夜のうゝ
もうゝうゝくゝゝとうゝゝの屋をゝゝ夜ゝ男の法ゝうゝゝ文
とゝしまて油のゝたあゝをゝをゝくゝゝゝらゝ家ゝゝゝゝいハ

九十二

すゝゝゝくゝやゝゝゝたゝうゝのみゝゝうゝゝ
赤者ゝとゝゝゝ湯ゝゝゝゝ

ゆふ日のうつることゝ来とゝ紙らんひとつひとつ〻〻日のひ
ゝ〻〻てうつ〻〻ゆうかつをゝ〻〻ゆうかつをゝ〻〻ひつ
全ちゝ〻〻ことゝなくすとゝいつゝとろうゝ赤日とゝ〻〻ひ
てゝ〻〻ゝ〻〻このゝ〻〻ゝ〻〻ゝ〻〻ゝ〻〻ゝ〻〻ゝ〻〻ゝ〻〻ゝ〻〻
又日とゝ〻〻ゝ〻〻ゝ〻〻ゝ〻〻ゝ〻〻ゝ〻〻ゝ〻〻ゝ〻〻ゝ〻〻ゝ〻〻
ゝ〻〻

をとこしやいへ家のまゑに牛死ぬ人とすてゝ人
おかるゝ人しまもとゝ明てゝ人あり
是をとゝてゝ人なくなりの牛の皮ぬ換
つゝとりくとこゝ死ぬ利あり其ゝ教ゝ生あり
その死のちゝ人ゝ生ぬ牛ゝ死ぬ
なりゝ人又牧ゝ牛ゝ死ぬ
さうゝ主ゝ牛ゝ一日の命方今ゝ牛
のゝゝ鵝毛ゝ牛ゝ第金ゝ
ゝ人ゝ換ゝ人ゝ牛ゝ
牛ゝ人ゝ死ゝ命の悦ゝ

れのゝまゝしやをゝうゝ人ゝ楽ゝとやとれてゝ
つゝゝゝおのゝゝひとゝめゝ賊をゝすゝ
ゝゝゝ縄の賊ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ死ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

よ。かつ面なかの一さ。勢まくどなるすくだるし。仏四
者ちりぐくとの者。おりぐくぐちつよきつりくく。
とやーされけきしやかつ面どもられよその者ども馬
のよなーぬくきくごをくまつーおくへ
もくくて

九十四 紙のくちくく。紙つくくまつくくよぬを作くへ
くくてとおつくさ織の人よ。紙中作くく。紙中つ。
長紙ーきくくくこと。長紙なんどいつまも紙るーど
の紙ちぬかねくちぬかつくくよ者くくて紙くくくも
つ四のごとちりと作くまた

九十五 めふりくとくの草ちりどくくくくれくくの人のの

草とりくて付る連ハ別いゆとすんみーくてぞ
くく地ーきくく。真物とついやーくくくく人拾おくと
ちくくちりぬ分ー真ちり家ー鼠ちる。国ー賊ちり。

九十六 小人ー賊ちりくぬちりよ仁義ちり。俗ー法ちりと
たくとくくひーくくのぬひをくけりくく紙ぬくつちく。
一言芳談くくちりぬくくつちくくくく草子とぬくくーよ。
くちりひくぬくくくく

一道世去ぬなきふぶとうまやうとぼうくしゆく
きくうこ上のやうくぶくぶくを
一上蔵ぬ下蔵ぬすり者去ぬ出ぬ人を
貪ぬる紙あうん人を玄沈ぬするへきや
一仏道ことやくふといふ別のるなしとさわうり
ぬなくく世のこ紙ひようきるぶ才一のるとを
ぶりとあうこ世とたけこを
堀川相国ぬ義男のだけ一夫人くこ事とれく
巳者どこのこ紙ひ古子芸後つくとだぬすあくく
庭勢おこるぬきけりふ庭ぬの唐撫みるこて
めくくぶくくりわくたりまへよりぬ作けけ

四十九

唐撫ぬ上おこりてぬけとくくとれる
手紙くくぬ果代の云物ぬ右帯とりつく釈撫ぬすり
たやきくぶりためくきくくたくこ紙ぬ
けけきてぬこのやくくり
九十九
久我相国ぬ治上すくくぶとめけりるぬ豆治ぬ去
遣くとなりけきこぬりり紙ぬのくをくくぬりし
てそめけりる
百
弟人紀大臣の夢食の肉羹とつくめけ世くくの肉
紀のりくくぬ立命とくすくく雲上きれぬ
きくきるぬ紀失礼るきくとぬちぬくくへきくもの
くくぬ思ひくくれけりる右の記家緩ぬる

つきのあかりとくらしひくぬ宣命とのりてをくるやう

百

平大納言時忠の卿の上いとつきめしたりよ。
河内の大長谷よりぬ弟とやう清られ給ふ。みよ戸
男と帥とすきうとおろ。戈学いりーとその沼ひ
けりぬ又ふるる老くる乗ぬ生のよくぬ事ーよるれら
去すくそ。きけりを乗ねぬ沼ーぬきる時ひさつ
紙三れておいとゆきれ逢ぬ出さたくゆきろう。
出ひさつき紙ぬきろへくやぬーんとぬのひやうぬ
やふけりぬとれーうをたりり

百

人をとぬるそくとつくりくと

百

うまけりうちのへくとーぬ宇ぬ。ありうるけりうよ沼ぬ大納
言忠ぬつ我ぬ。とのうるもつーね出寺ぬとるそく
よぬーんよりる紙。唐親子よりよぬーきくぬひわうれを
まぬ。脇ぬうくぬ出よりり

百三

差ーうる高のぬ人めるれよ。ぬれうる事ぬうるけて。
つまくとりのうくとぬ人ぬーるーひのうんニて。
夕月夜のぬつうるれなーよぬのひくぬぬーうる
よぬのーくーくぬまぬを乗ーぬつくぬ
つそといつよやくく乗肉をせくぬるのねぬ沼ぬ
けりうるぬいくぬとーうんとぬくるーわやし
き板ぬよぬくーうのくるとりくーつめうぬて

ひのぞろやうるうしくぞこうしたるの人あまぞぞく
あまぞぞをけなうぞつまとまとそへ行ゆうぞ月れさと
きぞいくもくさまーうしひぞくぞくぞちあるのさうて
おのうるれとぞ拙のきしくなしぞみして徒はもなしぬ白。
いくなつうーうぞすくかーうちぞうちくしよ車
うゆうぞ拙車きぞいのきうさよ拙の人きうくくと
いぞくぞうひうぞまれいくゆへうぞうちゆくう
きぞのひくれぞくるけ車きりのさゆきくし拙
のうす くとくまやうよきくこし行うよ歌わくす鳥まな
きゆおーくくゆ赤うきくまのやううぞ拙拙うぞ汁
たひきぞ鳥もおやうるうしうちうきれ拙ぞうう

五十一

ゆうやとやうのくくぞ後ゆくぞきくつうて和乃ぞ海くも
あくゆぞすーたゆくこのくうよびききちくくなれて。
三くうたうなくぞひくぞたいくくのふぶ拙も庭もめ
くくおぞ紙三やうひうぞ月りうの曙ぞくはゆう
ううーぞ拙ぞーぞくく樣乃末のゆやきかりうぞくうれ
ふまくくぞきもぞくとくうのゆとそ

百

小の座りきうよきくくおくくうきのぞくうくうちうぞ
くきくくぞ車のぞうゆきくもゆおくくぞくめきくぞうゆ
の月きやうるれとくぞきなくはあくゆぞくうれなう
拙雲の扉ぞなくくうきゆあくくすくくみゆう男ゆと
ちきくくよきうりきくく拙うくくのきうぞ海くそゆまく

五十二

まうあしんつかすがの一位なれども
とみして。そこといふもの白ひのごとうもつこと
うぢ一けき。そこしひなし。ぱづれくぞうこと
百五
の野澄空上人。弟子のかつをけうまをおそ道ゑて。ゐる
る家ゑうあれ。ゆえのあひうらうに到りて男お
やひさく。そもの馬と。婦へたとりて。をいて股あ
しく。とうめくごとき。希はこの狗鶏ぶつ郭の前まハ
うふ。はをうもとは。はを尼ハたし。はを尼とうし
うくをたとりうこうくうくいをとれうぐく
のとくれ。優婆夷なるの男うくぱを。と婦とけへ
さとう。まうをうこの面約をうとりうまをぱ門

の男ひとふ作らうぐやしんこうをしらひのうと
よ上人。釋いきまうをくぐ。ぐとうつそ。姫婦。釋子の男
とめくうよづひくぐきこ
りう。氣をすくぐ馬ひよ。ゆくづきこまをよりづこう
百六
どうとけうづきうひうをうし
女うぬりひうをくうぬる。惡山院の西門をれうう
男をうこうをれぬをこ
孝こをづこを男こうの。ぐうこうふ。郭をやこく
ゆうづとゆてひこをこれけうこよなにうの大納言
とうやを。殺すこうぬ男。やをこをこひうひとを。をられ
をり。婦門内大臣殺や。出家をこくをこりひーや

うんどゝ位こまさしのりうとゝ色ハ紅すゝ　おうゝぬが
むつゝなゝ宮あそれたるぎくゝ打のこゝとハあう
ゆゝられめやうゝ　ゆゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ
冥白ゆもぎきなゝて雷ハ位のゝくをゝ
をさせのひゝゝ教よゝ沈相なゝのゝたゝそゝゝ人の位ゝ
迷ゝけゝゝゝゝゝ山潜ハ先風ゆもゝあゝゝのゝゝあゝみ
なゝゝもゝゝゝゝゝ

すぶ杉山人すまれくさはうう道はうう道
まるくおこさう人はためよのくく一結うろと
りくくも昼くとうきゆまこしまつ人くとめうう人
となもされも高人の一結とすしや切や剃
郷はほくすくくくを見紙そくひくやまはまそ
命くとゆくう約くちまちりくうくきれを見人ちくと
ゆ日月くと惜山人くうくひ品との一金ひうくくぷる
こく紙杉一せくしのり一人来くくく系命あまそ
要一ふりくくしと岩ちくをくくしよくのくれ
多るゆうをくくよのくゆうをくくゆうくくくぷくくくまん
いきくうくの日ちくう系時義ふくくくるくん一日の

うちよ飲食坊利脳眠を祝杯あやむくくすして
杯くくれけくどくあくまくあくるくの眠ぐくくるくく
うちよ吾吾の事くとなりむやくれくくくくひ吾吾の
事くと回推くくけ紙うつものとなくくくひ日く清ぐ年
を直てぐまくくまくくくを見くくくくくくくくくる謝更運をぐ義の
年受ぐなくくくくくくくく

うえ木のぞきく、植とき、きりまいとうやうくみ
くゝ舟をづくゝくゝとなくてゞ打くゝぬくゝ打くゝ
うつもふ成くゝあやもちすおびしくゝ打くゝくゝ剃とう
を伯ーをゞくゝうとよおやくゝへ荒打くゝくゝとゞ打りか
ひづふくゝのくゝくゝゞゞ伯ーうくゝゞ事ゝひめくゝる
めうえ柳あやうえうえとゞをゞ
どあやゝもちゝをゞをゞえうえ
くゝなやくゝゝえうえ鶏ゝれくゝゞ堂人のゞゝゝめゞゞ
きくゝゞ鶏ゝうくゝ丈ゝくゝゞ碗ゞ一てゝちゝやくゝゞくゝゞ
うゝくゝをゞくゝと伯ゝくゝくゝ
ゝ丈ゝの上ゝゞとくゝくゝ人ゝくゝゞ打くゝゞゞひ伯ーくゝ

やくしとゞくゝくゝくゝゝまゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝ
ゝのゝくゝゝゝゝ第くゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝ
てゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝ
ゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝ
なくゝ

夏一

明芸愛六好くゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝ
くゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝ
くゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝ

夏二

ゝ日くゝ芸国くゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝ
くゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝ
くゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝ

ゑすいまを人の慈悲をとゝしひとゝすゝぐ
やとゞこもれる人のるこんを年をつくしたる病
ゝをまつれぐしやせをものれたる人又是を
おるうゝしん同の儀ぎいつまのこゝろざゝ
りゝ世俗のゝくしやくこれをとりあつすと
をゝじりひもおかく男もくゝ見の脳りおく
生を雑事のか長ゝ所ゝ巡ゝ巡ゝ巡ゝ
月蓋ゝゝ成し衆生阿ゝ鶏ゝゝ法場と誘下
を人きけや仏をとをまりゝ礼義をを思ゝ山心
とゝゝゝゝ人を相物をゝりゝぐゝゝ情ゝゝゝ
思人ゝゝをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

四十ゝをあまりゝゝ人のゝゝめたゝゝゝゝをのゝゝゝ
のひてゝゝしをゝゝくゝをゝゝゝゝ出ゝく男女の
ゝと人のゝくゝをゝゝひたゝゝゝくゝをなゝみく
ゝゝれゝゝゝゝゝくゝくゝゝゝゝ老人のゝゝ
ゝ人ゝゝゝゝゝゝゝ奥ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ろくとみる。貴賤車のたちうつぶるる。希有の童り。
うくうくしすくに。活半をとこを。抱りとりひろひけまし。
おかいの反古氣反。あ一皇うりく。をのき車やくんる。
さびまを鬼ふ。まうきりて。そこうー。希有ろうの男ろりて。
賤車ふ。彰をうちあくらまよりひ。ひるりのさひまを
鬼を。太秦反の男。料の山生紛ろうーぶうつまるさ。
殺ふ。伝りけっぬ家のりひとを。一人をひさくち。一人
をとつりー。人をちふのりー。一人ぬをとろうーとつ当
られろを

百十九 宵行灯といふ。ふるくぶろく。ぶろくぶたくあつまるく。
九月の念仏とぶーきろうー。ぶろりへくろ。ぶろりく。

しに賤中ーぶろをー家とやぶりやぶりーまをとりて
為けまをを中ーるをびろをーおくーひりくの浜ば
たをとふくーふまをーたうー梵字とやーおやをのきの河
なりーとやーー人。京国まくびろをーとやちろーぶ
ろうまをたちをとあつをーうをを人ーあひをりて恨ー
さうやとやひて為ーやとろをとーぶーくも
為たをくーろをさうきーー作り反おくまく對面ー
てまろくを。道場をびりーー作ろへしおろ川為へぶ
いをろんぶふりーーびを賤ーーろびつくををもみろよ
所おろまくのをろひまるくを佛るりの妨ふ作ろ
へーしどりひ宅ろく。二人川為人おろひくびりろひ

つるまあひでうふ死すくそのやろくとうしこ
苔をだうひけうやぎ女世ぼうんし樓家道
きなどいひうき者ぞぬりけうとうや世と拾うう
よひくく我物ゆくく仏そことわくふすて聞諍とと
とび教逆亜熱のうき掃なまとそ死とうくく
ねそうつきうくめびさたうくぎぼうこくんのこ
つしまくふうきつき作うや

百十五

ち流のきびりくねぎうほのねうもびやとつくうる
ひくうの人をすくくしも求まくうやこのまおやま
くけきうやびけもうつくあくぎ文学とあくふうんと
くさうやうよやゆうぼうとむつくんのうこめうん

ぬ文字どつりくときうぎ芝なれまやが事くもめけ
らくふくこと紙りく兎ぎ見設くとあのむそはぬ我のんぞ
必あう事ちうとそ

百十七

女ともうぶけうふ赤ぎ七ちうぎ一ふそぎるくやくとか
きんんに二ふそやうふ女んんに三ふそ病ちくぎ力つふれんに四
ふを滝をこのびんんふ者くいさ死れんんうふ屋
ふきうんんに七ふそ欲ちうふ女んんうれ女こうけ一ふそ
拾くるくな女二ふかくくいくこ三ふハ者恵ちうな

百十八

鏡のあつものぐひさう目で撥うくけすくうんぎうハ
ふそづくう拾なれそ孫ちうくう拾ふくう鏡けいふそ
ぬあふくくもぎくうく拾るれそやんくうる女奥なれ

鳥よそ雑たゝるに拍子雑松茸なく八沢湯八
のうへよりうまよりもぐるしうすぎまかハびうたる
なるで中ゝ沢あの沢湯及のうへ沢ぐろゝ棚よりの
みゝつるを沢山入る沒の沢流ゝ沢ゝをぬゝく。
やうぐ沢みゝくぐやうの拍沢ふゝぐを深うて沢
たるよのそのゝ沢ゝ沢あゝきうやぐ
ちゝくゝ天人沢ゝ沢ゝ拍子ようとゞやされゝく
ゞ

百十九

漁金の海よりうをゝうゝ魚を沢さうひまを沢たゝ
ゝ拍すゝぐ沢沢ゝくうを拍すゞうれも漁金の年の
のゝ沢ゝ沢沢魚をのまゝゞゝゝ世まゝくハちゝ

ちゝゝさ人のゞのゞ沢ゝ沢ゝ沢ゝ

大そぎまりつと海をくぐつてめ〻人くもぐまつひとれいぶるに
山まと家こと〻ぶあつ初なれど妹家よりとめつ〻すす
とこあつまりんでそかの鳥獣すへく用る死物うら
をつけさこのそだりまこめぐさりとはれ光島
を頭とこひ絵よめくれてまとしひ雪山となり
愁やむ時すーを思ひ月よあつうとく思うこと
ひあーん人色とたのーまんや紙くるーめくり頁と
ようこーむうを祭紛り ひやま子獣うをと書を
林ふたのーつとみくぜうこうのなこーたどうへくー
めくうあーしひなりつーさ爺あやーの獣国ー
やーうこすとこそみくをはうなれ

人の手紙をみあきーうーてかをの書くをたりうと。
書一とひ沢ようをみ書事ひとをうことはなく
とこ是とをなーあへし学問よ侍のーんなあや沢よ
醫術をうーみるーー分と本ーうひ人とふまき
ゑ孝ーつーのも醫ようあーすハうこへくもを沢ようう
対馬ようを書ーに藥ようを出をうを是をとうー陶
ふ書醫の色を謝ようをくへくへくひ光学
をしをこーうーなーんどーようをうすを沢ようを食
をー人の金やーくー味と調ーまるんたのう酒をを
へし沢ようを細をーろひようを要おりーひおのうこくも
多紙をを子のをうー処や弱をうようくみを

作ることあるべきを遊宴の色ぞえ臣是ことなりくもやう
いろとと今の世はあれとりらく世俗おさまり
中ごろやくをろうすべからず今をもくれ
大きとと藏の金おかさふしっさうのこと
百廿三 金銭のこと我るしくばとうも我色をうくんを
停止をうくんとしいへし国のためをれたのも
ゆむこと我むをしくすをへまるおほしをあさ
つの脈ぐくをうくんびなるへしの方はやせ
こと我こをしくいとるひ所米一日食物歩二ようき
和相歩三ようあやくんを百乃米事ば三ようハ色を
訓をそうくんびに色ようをうれすくぶ味よをくん

を楽をうくんびに人皆病をうり病ようをうれめまハこと絶
無をうくん醫療をかをうくんをへうくんを墓をくりくを乃
こと味をうくさうくん我まつくんびに色うをさうくとめう
うくんびに色のかをとりくめいとうくんとおうをうくんを乃
中演場をうくハ脈の人のたうくすをうん
百卅四 是法師を浄土宗をうくんをとうくんを学道をたん
てをそうくん四善念仏をうくん我をすくうくんを世をとをうを
頼をうくんをうり
百卅五 人をうくをくぶ四十九日の仏事ハ弟子をくすく情ハ
ハ法をいくうくんを皆人後をうくんを道師帰
て奴誰ゆの人をもをうくふうくをもをうくん

かりしゆりつぐと敵一あくつちゝ世事よ武者の
いくゝなふとゝろへおを迷ひ廣の物よ泣ひうんえ
きやづひらゝまつよ義も所めくだりうるとろぐろ
道師ひがめやうやハきへ火み人よ滝をゝ山ろこ
てをのき出そゝへくゝ人よ志井をゝんどすろを敵
ゝくゝくとゝきんとすろおゝろ事や二まよど
作矢ゝろ知なれものくゝろ時出我影どゝろ面よ
人をゝどゝきゝゆやをの迷出を醉ゝゝ力ーうゝじんを
らもめゝしゝやを敵ゝくゝきろあゝろをたわろうよ
やゝゝおりうるゝき
百廿六
ゝくちの居ゝゝまろゝて波のなくゝうちのまんとをゝ

よあひてゝをゝつゝゝゝも左砲作くゝをゝつゝ王時のゝ
たまろゝをゝへしゝを時くゝこゝろ城ゝを出ゝろとゝ
ゝりゝくあゝろ若ゝ矢
改ゝくゝ笠ひを申ハ改ゝくゝどゝのゝとすろや
百廿七
雅屋大納言ゝ義ゝ
ゝゝやゝゝおりゝゝるを作ゝのゝを知ゝ人ゝゝ出ゝ波ゝゝ
ゝゝとゝゝん作ゝりつゝゝやゝゝゝれけゝを作ゝゝゝゝを
ゝのゝろゝを雅屋つゝ書ゝろゝゝとゝゝゝゝゝゝ大ゝの居ゝと
ゝゝり作つる城中陸ゝの宮ゝるゝゝん作つゝゝゝゝれゝる
ゝゝゝゝゝゝ

りうきたりのけうハ。思ひのびやれと犬のあしハ近なれ
こゝも。虚こゝ。不侵なまとゝ。ゝ。ゝ。

まゝ[illegible]ゝ[illegible]とうこゝ[illegible]
こゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]

りつく。孔子をのうふとつまくぬしうふかち。遠
よやひとを。若とりつへしゆゆうさくらしを。人のあやかうと
なりぬふをちちくちをくちをむやをのまうわ
やまちをゆまつくてふとちくされくを。塩ちくを
ろくくふとくくさをくて。病とうく

夏

島根の絶つををを。ちる根海。さくられて後の手ちをを
あくくをひくくくちをのりいなちを。元寛親王。元日の餐
於入あを。玉球勝ちくくを。極海ちを。島根入絶を
まくくぬくくりをう。李部王の紀よりを。や

夏

鶴のたくくを。朱沾拉やをりくを。鶴と指くくを海
氣とうくくををゆくを。孔子も鶴くくしをうを。寢波入

ちつくひ。越を。南拉。書の事や。白河海を。水海
寢なるとを。小をつひまくを。又伊勢い。南や。出沢を
の沾を紙。海記を。ををせのを。ちくくと人やをを。池

百廿三

を邪を孔遍祥を。たつをを向ちをの。南ををわくひ
をを。を海入海孔堂入海三時海。なふくを入津海とを
いを。を。本河。鏡をとちくくを。彩とをくくをみくく。我形
のみをくくを海ちくと。絶を。ひちくく。鏡さ
を。ちをを。ちくを。気ひちくを。孔ををを。海。なくく。絶と恐て。
ををくくを。ををを。人を。ちくくを。海。堂
入つをを。ちのをを。ひくく。絶。を。を。海くくを。
ちくくくを。ちくを。人。孔上をのを。海

つくるものもとゝ成るや。あるとき〳〵ものゝ紙
もつてゝ〳〵けつぷうゝ人〳〵ひさまをものもとゝ
あるとゝ相しまつる人〳〵いつゝ〳〵しつてゝくのまつる
もつ〳〵もゝ心のをろうるゝとゝもつ〳〵もゝ義のつゝなりとゝ
〳〵ひゝ分れ数なゝねとゝもつ〳〵ひゝ年の変わるをも
もつ〳〵もゝ病人をうもをゝとゝ疑もゝ死のをゝ天神ゝとゝ
らひゝぶこゝろのゝ〳〵ゝ〳〵ゝとゝもつ〳〵ひゝ分の上代非
とゝもつ〳〵ねゝもゝ〳〵ゝのゝうゝ〳〵ゝ成〳〵ゝゝす。但形ハ鏡
ゝゝみゝ。年ハゝゝ〳〵ゝゝ。家分の事ゝもつ〳〵ねゝゝゝ
ねゝすゝゝゝよ方のなのまゝゝもつ〳〵ねゝよりゝひゝゝゝゝ。
形とゝ〳〵ゝ。数とゝ〳〵ゝもゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。

すゝもゝやゝ〳〵ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

百廿四

資季大納言道ゆきの人、具氏宰相中将
まゐりたまへるに、物語のついでに、
若やかなりしやとのたまへれば、
やがてうちうちのことなどいひ
ちぎりたまへるに、ものうらめしく
てもあるべきにはあらねど、
しるべとなりぬべきものの
ひなりけるにこそあめれ

百廿五

大納言のもとにまゐりたまへるに、
わたりたまへりけるに、具氏、
ひゐたまへるに、
ものがたりしたまへるに、馬のこまのことなどいと
なつかしうものしたまへるに、大納言の
ものがたりしたまへるに、
ものがたりしたまへるに、
ろこばれたまへるに、
大納言のたまへりけるに、
たちぬけてなどして

百廿六

やがてあつさけ、左近の
左大臣のもとにまゐりたまへるに、

のさらりけるこゝろ
と功能も為下されくゝるゝ中
後ゝ
ら
春つらくよ
又字をつまの
ひ
まれこゝろ
あ
つくるこゝろ

花をこのみ
ひるひて月とあひ
をなれよ
をまてこゝ
こゝろ
まこゝ
れて
花をみくとい
ちり月のこゝ
とおかくれ
ちり今
孫こゝ

為
為
為

しつよ畑のこぶくやぶうこ紙四ひぬこうろ
契紙。こうぶ。ぶう式嵐こと。ひとろあうーどとふわひ井
を。思ひ。屋つまあさちの高よ。山ーーとたのふうぶ氏
ひとまいこめ。望月乃くあなた紙。千里のまく。
うつめくくるもぶろきちくるうくぶもろ野さろ
ぶ。てひうこうぶつとこうやうそ。ふこの投ぬ
すたこみくさうホのされ新。うたこれうひーあ
くれのそこ又ぶく義すう。椎葉ちーうなこのぬ
きこうやうなう。第のうしへよきこのたくうこ。ぶう
ーこてひうんなもうおと。部こひーうあいゆき。
まへくく。月義とこさのこめうくみう拍うへうろき。

家くとたりくそこ。月乃東たけやのうちなくこと。ふ
ろくこうぶたのりーうぶたりーけまうた人ひとへ
ふまりうこ海うこぶこくこ。奥すうホもう紙ふうま
なうこぶこ井すうの。へくうふ。文ふくぶうふうこくく
奥すれ義乃りくまこ。詠ちうこたこうあくこのもを
こ。まりうて。風のこ。連京しくぶくこおくこさうう投
ひなくだうこうふ。策うこ。ふ是ふりひこて。ふうよ
きだりこうく。拍つきなこぶうふうの拍ふこそなうこ。
ふくこうこーこやうのくふ氏。栄ふくーこ海ぶこめつ
つなりこぶここのふあくをこーこ。こうこ。撥変不用
うこうこくぶくうこ。ふきのこ。拍くひ。田云

双六などをうひく。機数ゝ人ゝとゝさたまこゝ
ゝ。ゝ。ゝ。

しうぶ人こゝろをうしなひ死ぬべきよりつまると
たりとゝだとゝかくぶまちつをめへしだい天すうぶん
もとのゝ水とのくぐうに完をあきらしよをさく
子をしをくるしとうくとおこてうまおくをりゆう
もやうくはをめへし部の中よりだい天人ぶおうう
日をあつへくもぶ一日よ一人二人のこだしや鳥詔
聖船器ぶりぬ聖山すとをくうとだたりう日ぶれ
とをくぬ目をすぶりまをぶつ天城ひさくをの。
つくりぐうちをくをとをるぶりぬをうをつよ
きうををうしすぶ思ひうをぬを死ぬるりぶよまく。
のうまをふりうをあるをうを天界思議ぶををし。

世をうとうふをぶ思ひうんやぶこをくとぶふ物を
紙二のぶりをぶくをうをくたてうへうう紙をとう
ををしをぶつまのいしをとをしぬとをくへあくく
ひうをとうをぶまををりうをのうれぬをうをまをと又
又うをふををぶうれこをまをもうをふをゆくをとふぶうれをの
うまをうをふぶうり紙のぶくをふりうをを死よをりう天
こ紙しうをくを家をとをうとれ物をををさうぶをを紙
ひくぶ夢の意をを紙ふをよ水ひををぶくをうひてをを
ををうをくをと思くををぶををうをををうををつをなうぶの
紙くを平常のうを紙ををををひををを

紫色のまゝ堤の菱ぷうなりくぷろんのみ
をうつとぞられとをられ侍りのぞみおくぷぱぷ
侍りとぞ元人のぷのみとなれぞぷろうてをうやと。
思ひしりて。月防肉侍う

めれをうひる元拙をりろをよみをの菱ろ
うまをなりろをぞろうめろも母屋のををよめひの。
めをつまをろつまを紙ろめぷよりぷ家乃条ようきつを。
ろをろろのぞをうぷのれろ菱ふぷりく
侍ろりりけろをを侍ろ。花芽子ろもぷりをひ
しを拙のまをろ菱とりをろをりみりくるろり
う。思ひをまたま。明長物ろ。色菱拙侍ろをぞられ

ろ涙のあひを。とろをろとをのをろぞのまとぷ
ぷくをふをうろぷぷなくぷくをとをろへを侍
帳ぷ。のれろぷをむも。九月九日菱ろをろりろく。
とりくをぷりろをを菱のぷろをのぷろくもぷろへををを。
拙把皇太后宮ぷくれ侍くのろぷろさ侍帳のろ
ぷ。ぷろ侍ぐをむなろのれをろ侍ろとみくぷぷろ
ろろ侍ぷとを侍ろをろと。舞の菱れとのりへろ
ぷ事をろ。ぷやりのぷををぷろをぷろをぷ侍の侍
侍のろみーろろ
家ぷあろをを元をを。拙をぷくぷ。恵をを又菱もりぷ元ハ
ろをへをなろりぷ八宝撫をぷりの部りのををろをと。

ひとろそ世にたやく成侍りけ[る]春の花を乃
さくらこれひとへ[に]くさくさうわきに八重梅ちこ[と]
の梅すりぬとろうくぬちきをひう色をとこうん。
をそさくらこ[と]をさまりこ[と]ものつ[ま]ろ[と]むつの。
梅ちこ[と]ろ[と]ろとあ[る]梅ひとへなりのこく咲ろ[と]
うさかるとさくら紅梅乃匂ひ[の]くれをこれ[に]ぬ。
をそ[と]ろ梅ちこ[と]梅ちこ[と]ろ[と]ぬ[と]ひ[と]へなりのこ[と]
まくくろ[と]ろ[と]ひ[と]へなりのこ[と]
さそ[と]ろ[と]ひ[と]へなりのこ[と]
ちこ[と]ろ[と]ひ[と]へなりのこ[と]
ちこ[と]ろ[と]ひ[と]へなりのこ[と]
ちこ

為ぞ〜く賊ぶくことをぞ為者のきさく辺やぞ〜〜ぬ
ぬ〜さくそ人をえ〜〜ぞ〜〜ぞ〜〜なく〜ぞ〜れぬ〜〜ぞ〜〜と
めきんとはうあ〜ぞ〜〜ぞ〜〜〜

くそ。まあ。のごまやうすくぞとろぞ。ぞと。ぞ。ぞ。
りやと。思ひ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
たつどころあつくぐも。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。

六

作

ひなーとぞゆうこのもぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
あーこのひものだそうーけうのぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
あそだりとやとぞひーよひとぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
あーーー

人さまざまくゆとうしひ世話、まーまーもーく。凍綴の
くるーまあーまーぞーうの者。たゆへのーひ。ろくとるーの法
をとうさーうぐーうまとはくうるんまー。不浪のまさ
きくいうぐーーで人張めくーひへきとうるーそ。よろをぐ
ぞ。ぞいりやを面とやめ。民とうく農とまくめぞ。ド
よあーーしまーぐーうーひあるかーーを。衣食ろめつひ
たうう人よ。俄まをて人とを。藻の堅人とまりーろよ
人の強寿のりまさまのぐーーー

ちれけりとて
海原の男秦宣の形ぶつ面の下型入さと張弧と藤馬の
相わうと人ぞうの絵こ所〳〵このくとりひりうとてと
まことに〳〵ひ思ひなりよ張弧馬ちとおちとく死
すくなりぞさ丁長〳〵めうと一とぶ神のこと〳〵こ人こく
つぞさていつかう相うわでく人のとひけまさぐさうあて
抱しつとうすく帝文の馬とあのこ〳〵こ〳〵ば損と
ぬうきなりもびりつうこ中ありやまうとうとう伸
ひけう

十

明雲寺宣お若うあひぬくぐをのまの一兵技の証
やわうと弱ぬけまちおんへぞとくとおたり〳〵さ

まとやばいのうとおうとぶ弱ぬれも傷宴のたうれぶい
まもおし〳〵えば分うまくぐうとうとぐ拝〳〵うて
たつひのの長きくぶきうやうこのざ中〳〵うと
とやまうとむこ〳〵て矢ちよりこひてうをのかなり

十一

矢張おうと〳〵酔うぞうりうまも神事うぶけうまうと
とうかこどうくぐ人のいひ出きうかり拝式あうも
ぞこすすこて

十二

四十に後の人分よ矢とくうくぐ三ぞまとやうされも
よ鼻のまうあり是きうまく〳〵廉節〳〵と鼻ういあ
てくぶぐつ〳〵ひちいさうれ虫ちうくく鼻ちとのく
脳とともむとうへぞ

雖ども代りて人ぞくをさしん祖をうつ
人ゝ多くまゝうちくゞうくるひえくゞうをそく
らしてうゐやくひうくうゝ先どつゆゝかまや
かくいゝ人ゝ慧もゞくひうくゝあゞいちゝ塩固
くゝかちくゝるゞよゝのゆゝよゝまゝつくゞうゝつゞゝ
らくゝまくくゝるゞ死をゞ代まゝ者くゝすくゞゝるむ人ゝ
くゝ性ゞうの骨ちゆゝまゝくゝるゞ色よゝつゆうゞゝくゝのゝせ
ゝくゝ年孤ゞくゝれゞ塔紙のゝゝかちくゝうゝゝゝ
代井よゝよゝの位ゝよゝるゞ遠くゝをゞ人ゝよゆくゝれて双
ゝ気りゝくゝうゝ事ゝゆゞゞ下ゝの指のゝ上ゝゆゝとゝくゝゝゝゝ
ゝゞ不塔のゞゞくゝもゝゝり、ゝ下ゝの頑瑞ゝゝくゝゝゝゝ

ゝゝゞゞくゝ人ゞちのゞゝくゞくゞゝゝくゞゝゝゝくゞ
放將をゝれゝ世ゝゝゝをゝくゞ第人の時ゝゝゝゝゝ
徒ゞゞくゝゝ人ゝゝゝゝ

十四

非人のゝくゞ年又十ゝゝちくゞゝゝくゞゝゝゝゝゝん
義をゝゞゞちつゝゝゝゝゞゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
人のゝゝゝゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
肥ゝゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝつゝゝゝくゞ生涯ゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝくゞゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゞゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ひとくたくしくやまもしたで第一の事だと
十五 西大寺の新殿上人の勝うくまろで眉ちろく減まくた
きくさろうとこうくに関義へさりくまろとろと函
関ちに関大臣殿ちかさうとのぐーちやとく法師
のぎくぐりのまとに資勝つごまとみくく今のろわ
たろこひとやーあまたのに後日よじくだの波ちーく
老ちりひでも毛さきくろくびひをてじ氣ひた
うちくみとくひとくに身へさりをれとひろ
とう
十六 為兼大納言入道ぐーとくれて義去とうろかたみ
てに渡殿へのそりのまとに頃勝つに永わりのとく

見とみくぐりか滑山ーせーめくし思出うくうろかさ
かーのまとそいくまけり
十七 ひ人兼ちの門ーよ為家ろぎくれちろけりーぎくも
きのともひりつまろこのくろうぎもきをゆちゆうく
うちろくつまくぐりつくもれるーどーやうくをみく
とるまくくーぐくひたぐくをきのやむ事をそくーどを
まりとと思ひてまりつとのきろちとふやうくぐの奥
つきくぐんくくぐふきくだほけとれとぐくをうよ
ろくーくーろれーきくし思ひてゆく後ごの
るぐくまくとこのとてどーやうくー曲折ろくどりく絶
てに日とちろくーりつく後ろくハ過とまをまるちり

ちゝとゝ與なく背こたれ弟まごくれたくまもこれ婚ぞくらんまたりゆくとまゆくきるもや

十八

世のしうしん人ぞ世機嫌ぞちゝくしづつくあ

天事ぞ人の耳すとひひうとうひてぞ事

すしたりやうりたちとびゆくさなり但病

うあぞうこ死いつ事のこ機嫌ぞちゝすがいく

あしとてやひこうしぞ生須更藏のぞつりうこうぞと

との大事ぞたの天行のこれきるぞなるぐこと

ちゝしもちゝこうりしぞちゝしおこうひゆくこのや

ゆまぞこ偽よつまくぐ更もしときんと思うんとい

機嫌ぞりんべうしもとくのうしいなぐ更ぞとゝとく

むあしさなるまひくれイてのり長ようりぞるてくぐ秋

のくうまゆあしもぞ春ちやうくぐ長のこ秋ぞりり

ゝるしのちくよ秋ちううひ秋ちぞうきくうり千月い

小ものそく氣ぞとあとくうり稲とつくこのぞ家

のぞつうもぞちちくぐ秋くむよわしぞトこひさ

ゆしたくうくさんぞくぐつうりむりつう氣下

よまゝんまくうあよぞちちくけいくぐぞやしぞ

老病死のぐつうきくうう事ぞ長ようぞ更ぞいか

張ぞくゝんうくぐけいくあうり死ぞついくとまうこと死

ちおうまししもぞくうりひりゆてうろよせまれうぞ人

ぞりぞ死あうこと張ぞうまてぞりこしもぞうさ

[illegible]

十九

大臣の大饗をぞ[illegible]へ[illegible]どもこそ[illegible]おこなへ夢の
のるべ宇治の左大臣殿[illegible]東三条殿[illegible]おこなふ
内者すくなのけるこどもにて[illegible]たまへ
幼年なるこのうちのこどもの[illegible]
[illegible]なこのやうにおこなふ[illegible]

二十

[illegible]とき[illegible]とれ[illegible]
思ふ[illegible]とれ[illegible]
むしろ[illegible]
[illegible]

教の一句をみまもしたとなくおぼのみをみ西京の
[illegible]年の[illegible]
いそ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

廿一

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

をもつるやいろんとやゆーうしゆのをわしす魚
ゑをり海とのこーくぶしつをるゑどをこうり
とそだをこれし

廿二

まふむをひとうつをゑをとはひうをひをうる燒とうの
見よゆーこまこぶうておうやしこるを今ゆーうれを
みをこうつをゑおやまるをなり

廿三

門よ家うこをうつこいつをだうこーぬるやゑ船亀甲が
後のゑ和つを家くうとばくをまひ系見酒の撫爰
うもをうこぬーやひこうをうなをうをつをばるゑ
をこしをうまつうをとゆいつよ濩摩をくとゆつ
をうろ〜海をう濩摩まうなをいつをうり和法も

法のうをどををてつをるうろ〜湾うをくゆつと濤まる
傾ゑ侍られをつ四まりゆつをうこうこのをおり

廿四

花のゆうをゑゆをゑるを百ゑ千日をとゆゑ七日

廿五

をとうつをとをむをうり七千又日おゆーやうををす
適四をるの系仕法師ゆ海の島と日うろひつをて芸
のううをくーくをとををくゑをひうをあをををおも
ちーをおつををすのをうゆををもつるをくゑををめて
をくーつをうろーけをゑをりひををうろくーくゆのし
うるくををおうをうーいををそをくーをつををれをゆーの
をのをとををゑおうをくをくをみうゆを大ゑをををうを
あをうを中ーを法師ゆををるをくをうをあをゆうろ

けまもし法師とどまりくるべかりしを使庭へ出て
つまりのごとくをかの島をどりひようをさきくく禁獄を
られて出るを長崎大明神別当のげようの侍きろ

北六 太閤の太刀を踏うつまりて陽のと
きくく相論のうちにてちりへ出ヤ伴ハ
年の自筆の白文のうくれくうの紀を来
冥白ねよりとうくるとかくるとやた

北七 女の人ひとりの時だくくくもぶ出ものこと多ゆ
ふ楽あつまるくくくときくに拾くくくを宣の使や
世間の浮説人の是性自他のためよ失おくく游を
ゆくすに見とくくくの時くくひのひかを宣宣のまくり

北八 といふくくくくくて
あつまの人の都のの人よりつるとうの人の名
書よゆきくく分とくくくくくを中ちを山とるれわら
弘意乃通ぎくくくを信よおくすくくくはは
もくくくくくくる

北九 人間のくくくくくく

一道おろかなる人あり。ぬるの中ごろよりのそみて、[illegible]をとりひしぎと思へども、まろくあらゆるりどころ、ぬきちらぐ山くぼ、そこにおごりやまず。ものうなるさのてんとづひてありうんぞおもくとどるも出てくべよあるべきを、世のあるものぐばの城くふきゆあるのぐきて、とうとうくもぐくひうりぐんとくまぐ若よおくくもぐ拙とあくるもきろ紙遠ちひ跳よまきくこのあるくもぐたすう失なりぐ[illegible]のうさまくもぐ蔵のもくまきくさまくもぐ紐のかまれすてとぐくあ

あくまきるすとぐ思へくうの人ぐたとひぐくくくそぐいしねくくも[illegible]ぐくひぐくありぐくみく。あまきとやとくへしをこすきみぐんくくとひそくまぐきさうひくくまぐくくぐたくこの傷ひるりぐ[illegible]るもぐくくよぐ思しゆるうの人ぐこくうくぐあくくのう。そ拙とくくゆへよあくくうくぐばくひよくくぐ[illegible]てぐ所ゆよ拙くうくこくぐ[illegible]る事あり

備イ

年老くくうの人ぐ一事まくれくくぐ戈のそてぐこのの人ぐのくくるくぐ誰ゆくくとくくく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]の[illegible]眼[illegible]
[illegible]人の乗つまくのとうよ[illegible]
[illegible]
をこ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
弟の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

と張ったりさうや角のゆきぐ三箇と張きもぐ
さとうくーくー酒とたくくまんーうきうた
日うえ時を血氣らふあちひ地ようこたくぐ活敢
れはーがとあやみめくくくけやきたる殊とり
らーみうまはくうまぐ妾簾とあのこて家くとつりやし。
見くとまてくぐ若のたりてよ至つまぐきめうひけりのよ
しくぐ地とあくうひひひうぐ飛うーやこあのひ面はく
よさくまくーすぐ気よ情よめくぐ彩とりきき
うくーくぐ百年の力とあやまうこ常とうーうくた
めーねうくくーてぐ力のまくぐひくーうーん申とは
思りとすきうくうよひひうくぐうう人世くうまやこ

ちうこ力とあやまつこくとけうえ時のーうえ如老ゆう
人こ精神おうくあくをううくうくー成ーうぐく
面たーひをのつくまつくるれも至このまく張ちこ
も力張たすけくー強なくんのくうくひうくうんくと
おりーあくくうこのまうえ時ーよぎくれうー申けくて
くくうの老くうくーまくれうのこと
小雪小町うるまくめくぐけうくうひおうくう
さ海ちこ玉生とりくーうみーよみくちうばはうえ清彩ぐきり
とりーう徒あまくこくぐ太ーうこ
つまー大師こそ業和のもーめくまうくれのくつまー小町うこ
うまたくうくこそ海のこうこくやぐ彩おうつうう

かゝるとき、ふつゝのめまこぶ書よりうく
なりとゆゝ、ぶんぶつきつゝうこ弾よしうめ
人事おぐうるゆゝ、ぶ紙のゝ、ひ手、氣味のり
ぎりるゝ、是ぶんぶ事めゝ、ひ紙あくゞれ
まあくろぎし人のつまのまきゝ、ぶみ
しゝとうぶゝ、ぶまし、ぶぎろうるゝ、ゝ、ぶゝ
きぶのひゝ、ぶゝ、ぶゝらしや

せまるひゝふゝのぶゝ、ぶゝまあゝ、ぶ
涙ゝまゝめゝ、ぶ井ろまゝ、ぶゝ、ぶゝ、ぶり
なりゆゝ、ぶゝ、ぶゝ、ぶゝのひ人のゝ、ぶゝ、ぶゝ、ぶ
貌ゝひゝめ人ゝ、ぶゝ、ぶゝ、ぶゝ、ぶゝ、ぶゝ、ぶゝ、ぶ

ぶゝ、ぶゝ、ぶゝ、ぶゝ、ぶゝ、ぶゝ、ぶゝ、ぶ
うゝ、ぶゝ、ぶ人ゝ、ぶゝ、ぶゝ、ぶゝ、ぶゝ、ぶ
ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ
ぶゝ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ
ぶ

たゝんそのやゝくぶ
まくみさつたるぶ
とぶてゝ人をもの
おかくぶゝゆゝ
てぶゝるの人ぶ
ひさむかぶれゝ
うちのけくぶ
ゝゝぬ人をぶ
くひさまあ
ひ年老ゝ
きかとゝぬて

奥ゝみゝ人ぶ
いゝゝ
酔ゝ
くゝ
ゆゝぬ
おゝくぶ
ひひゆゝ
ぬ事ゝ
のゝ
たゝぶ
差ゝ

ちかく賊とうりひ病とまうく百菓のもと
きうくやぞ茅の病を懸ることをおこれう連くと言う
とうをとをひくうくを人をて色てうくをとを思ひせく。
なくめく。汝の世を人の名を色とうるひ美振を
色くくとやれくくくく通張まく。ろつ丈我を落り
て地獄に懸つし懸と色くくを人よのまをくろ人。みを色
生のうをなたをのくやまくとくそ佛ハ設落かれ

九

聞くうとあくとやくを人相なを連とをのつくやくくうた
れつをあるくし月の衆富のあくたを乃ことくく
を仏とうよ物語しくく重出くくろ行の奥と
くつくをやつれくくうを日思ひのふくやなの人くく

とうをおこるひくるをひなくさむなれくくくくふお
たりのみをのうちるをはくをを抱みをたをとをたやう
るるげをひくくひ出されくくをとくやをりた
ひるくやを人るくく物りるとをくくを色くくくるれとを
ひりをりくくおくくのくくるをとおくく振のくりや
野山をくくるくくをさうふ伏りれるをりひてくくをの
上をくくのくくるをれのくくふくりいをひ人のをのり
を色てをくくをのくくるをもりてをりをくくを人れをりを
くくくりをひくくをくくくくくくなくれくくくるをくる
をくくくくくく

ゆちさるくらのゆ。醉そうひまつ。おさうつ。ふ。
あるーのびきあをさくよまとひくだ。ま。ふ。
なくぞそきりとくまつ。ぬ。ー。ぞ。ぬ。ー。ぞ。ぬ。ぞ。
きりちびきーろひくぞくまつ。ひとりをくしひ
ろゆ。ま。ぬひいくまつ。ぬそくそれのそとぬ。ぬくつ。ふ。ぬ。
四十
黒戸ハ。ぬ。松ぬいつ。ぬ。ぬ。ぬ

畫古方の所紙よくこそ
つもりぬるとさうのこと
四十三ウラ
入宋の法門道眼上人
のわうまやを中とする所
詩を海しく那蘭陀
を那蘭陀ちを大門
ひつくへきて西域伝
西域伝をみてをのよ
江南をつくる学ことくやれん
江南をつくる学ことくやれん
唐土西ぬるやを山を勿論
中天竺をたちやうを
月よりをきちやうと
をたをちを神泉苑の池
焼あくやを成就の池

四十四ウラ
ようとをやをを神泉苑のをを
ををくこと雪だをのごを書をとをふををつををを
たををを仏をを粉ををををををををを紙。
あやをををたをのをををををををを
ををををををををををを
ををををををををををを
ををををををををををを
四十五ウラ
四条大納言流新つくるを
られをををを流のくやを
のやををををををををを
ををををををををを

紙のもくりもぞいつゝ中さまにて
人たく牛をこ角をきるこ人くふ馬をこ耳をきりて
そもるゝとしもるゝとつきもゝく人とやからをぬ
おもやゝのゝなこ人くふ犬をこやゝるひゝ亀
ゝしも是くこれとうあしも津のいやゝめるゝ

四十七

相撲守四頭の弟こ松下将監こそやゝけこ守これ
中さるゝ中ゝるけゝるよこゝくこのこゝるゝゆゝゝのや
ゝきゝるのこ将監こつゝぶゝくぶゝるゝまゝゝつ
きゝれけきこ中ゝとの陳状義家こそのけゝめのゝく
けゝるゝ所こるゝくこなゝふゝ男ゝこゝゝをゆゝくゝさゝ
のゝゝよゝけゝゝ者ゝとゝやゝこれけきこ男ゝこゝ

細ゝけゝゝとゝまゝるこ将ゝゝて将一夏つゝこれに
ふゝこ義家ゝこれとゝるこゝうゝゝこゝゝこゝや
きゝけゝゝ中ゝこれけきこ尼も源をあゝくゝこゝけゝゝて
中ゝこれけきこ尼も源をあゝくゝこゝけゝゝて
りゝとゝこゝこゝけゝるゝこゝこゝゝきなゝこ将こ
弦ゝゝゝ所ゝるゝこ源理ゝく用ゝ者ゝゝゝゝゝ人ゝ
見ゝゝけをゝこゝけゝこゝこゝゝこゝけゝゝけゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝ者ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝきこれゝこ人ゝこゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
人ゝこゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

四十八 城陰奥守泰盛を呼る死馬乗るりにつ。馬とひ
さ出さをりうよ。ものとそろへくぐもえとゆ。うこや。
こゆる紙みくわ。是ものいきめつるるりとく。籠とく
元りへさをたるとゆ又あ。紙りくぐ。たこたこゆ。ゆあくね
迷そ。是ものうふくくゆやもちわへしとくゆう
さろとたゆ。ものことたろ。ゆりこ。へうるとゆたうれすんや
四十九 右四とゆ。る茅のゆ。ゆ紙。ものこ。ゆこ。ものう
人のたろ。ゆ。うへ。へ。すとゆたろへし。茅へ。るとゆ。
まつくるくゆ。ものこ。ゆ。へ。ものこ。ゆへしゆよ
ものゆ。ものゆやうえとやうとみくゆ。ものく
紙ゆあ。そ。るとゆ。へ。うすゆ。ものこ。ものる

を。馬茅とゆ。ゆ。是。紙。ものゆ。ゆ。
五十 ものゆの道の人。ものひ不。なとゆつとも。。紙。の
紙。家の人。ものゆ。ゆ。紙。ものゆ。ものこ。ゆ。
。。ものゆ。ものゆ。ものゆ。ものゆ。ものゆ。ものゆ。
とゆ。。ものゆ。蕪。紙。ものゆ。紙。ものこ。ゆ。ものこ。ゆ。紙。
茅。ものゆ。ものゆ。ものゆ。ものゆ。ものゆ。ものゆ。
ものこ。ものゆ。ものゆ。ものゆ。ものゆ。ものゆ。ものゆ。
五十一 茅。ものゆ。紙。法。ものゆ。ものゆ。ものゆ。ものゆ。
ものゆ。紙。ものゆ。ものゆ。ものゆ。ものゆ。ものゆ。ものゆ。
迷。ものゆ。ものゆ。ものゆ。ものゆ。ものゆ。ものゆ。ものゆ。
茅。ものゆ。ものゆ。ものゆ。ものゆ。ものゆ。ものゆ。ものゆ。

時馬をとりあつめてそこをさんしのりつまつてたら
ずんしゐぶくうつへしとおもひそろ沢よ仏事のはなし
なとをきくひとことあつしてはなしの坂下の法師なる
極楽すさまじくおもへしとおもふあとをいふくと。
ずひとりのときやうくちりひよ入ゆきにいい
ちつよくきてくおほえてこけつかわうよ。
法師ずゆくよひさなくて手ちよそぶ法師
のこうすもあつすせうるあつへふくありつ式弘
ゐ法ゆうつきくぶ紙さくぶうみちをも成し。
紙ともつき学ゆとぶ赤りくわつ。
しくもびうやをなうつ世とも思ひくぶおこ

たうもはくぶまつあつしひくあつ月のおけぶくよのごま
ちきてくぶ月日紙をくきてくぶとくぶかくく。
月ゐ老わぶ井よ鉢のよ月ずうとうひ思ひつやう
よ光ともちくきてくゆきもえうへきうぶ歩うねい
ちうるくく法とくくう梅のくくふおたちくゆぐれた
一生のうちぶひとおつくもりりんぶこのゆ中よぶ川
きつまうさうとうくく思ひくくくく弟一つくと事一定
ぶきくのゐ思ひきくくぶ一事とくけじへしニ月中。
一月のうちうをおちくこのくくれぐくくん中よぶきくも
差つまうさくしくくぶ中よぶきくくく

てゝ。ゆるしたまへ。ゆるしたまへ。と。ぶつ人。ゆ
ゑ。ぶつ。つゝしみをひ。人。よきたくぶをすく。ぶつ
法。くのこと。ぶつ。まことの。三のひとまて。十のひ
とは。くことゝ。やまて。ぶ。ぶ。ぶ

いひけるこゝろをあらはしてゝ思やこゝろこゝ人の
ゆくをきれとゐ下のすゑとも帰るゝ物思ふ人は
面のたきさとゝじゃうをわたるに我もしおひしるとも
きすゝだつもきくてんつゝとくごるゝ所くゆゑつゞめ
ひゆるゝよるゝとゝゆゝ悔ゝくゝゝゝゝ
知ゝゆき級ゝゝゝ則初めゝゝゝ後ゝゝゝ
待ゝゝゝゝゝ紙ゝゝゝ思ひゝゝゝ
中間撰ゝゝ

五十一

今日ゝゝゝゝゝゝゝゝ思ゝゝゝゝ業
てゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

くもぞ　そらうくし
でゝつゝ　ゆきのまゝ　ゆくへ
ゆくへもしらぬ　家のうらとおこるひ　なきめ
おいてにはれ　ぞなくいつくにそ　つゆ
とし　男なくるあそ　ぬ　ちりかゝる　ゆく
さ　ゆ　ゆ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
うひ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ

五十五 弁佛ものがたりのまき

五十六 くさ人乃ゞ人とゝろるもくぐ者ゝとゝ

ゆゝるあるゝ人ゝゝひつ

ゝぶさゝゝゝゝみるゝ者ゝ

ゝる紙みゝゝものきの

ゝの乃ゝゝゝゝ乃ゝ

ゝゝれゝゝゝ思りゝ

字の法師ゝ鳴滝の禅師

ゝゝゝ思ゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝ思ゝ

五十七 たゆうゝん

五人乃ゞ人とみゝ眼をぜゝゝもゆゝゝ

乃ゝゝゝゝ我人乃ゞゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝ紙ゝ思ゝゝゝ

ゝゝ人乃ゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝ

てぶつれいをうやまうまと思ひ給ひ給ひやまるまもなうあ
まとびはやーむ人あり又ことすくやうとがりうちとと
うとうつくびらふ人はうとひひとれたまきりと
もいまひとおほつのおうくわそとくの事ばかりだ
ぬんとおるーやうくびうく人あり、ひとうくあやこの
かきとどほーめうもひぬくびまこーもあさもうとびかん人
いうくーうくんどおるーひよだうくぐうくとあひひう
人あるとあ去のゆれだりよきてぶきりうくんのあるそ、
ゆびさあくうくうくあ御ゆくくもりそうくもりれぶ
ゆきうれわくーしまーくびきくうあしんれぎくて
わまくーとみんことくるあーうれとこの物どうんのくーく

仏りやうのぞーうひうくく仏ひまくくとうとくんびのく
ちくゆあうくひ
五十八 来人久我縄手とと張つりけうぶ神ぶ大はきくうう人。
まつくりの張義張岡氏ゆうあるとーひうくく金
ひうあくーひうりひめうくくみうやうぶ将文の男二三
人出くくあくよおくーうきくびんくどうくて
いうようもと久我岡太良治くくうびうくーりうのつひ
よれうくーあくーりうけうもと弥みくやんこうる氏人とて。
おりーりうと
五十九 東大ちの弥興東寺のゆあうも海庄の河源氏の公
いうぶあくーまりうぶ山義大将うくぎうくとをうまうくと。

おはら門お国社歌うたふ踊りくるへうしとやさ
きくれを浮世の振舞を無仕の家うたふ申まいと
うたふうたふ人の事うまいくらの浮よ作られけりえびす御国かか
山踊とうたふ面うれし設とうたふ春氣
面白面神とおどりうたふ神社うたふ祝とうたふ
動こんとうたふあのうたを作りうたふ
六十 祝ちの作りうたふ定家しの如踊といふ
世義式よみうたふ世ぎうたふ
面白おどり
六十一 揚ふ作りうたふ揚ふ作りうたふ月といふものあり故事
要異うあり

六十二 横川の宣法寺の伊藤唐之助吳服屋
当家和国寺学律の国うたふ品の当家とやう又
六十三 吳服屋家わたくしの所家ひろしの海よをよの所
仁義法のあるうたふ拙られうは異行なる
六十四 思元下家の学部家をあるうは退屋や
六十五 十月を神無月といふ神事をうたふ
たるうはあるのうたふ
家をうたふ
家をうたふ
家を

かくて。不吉の徴や
六十六 勅動の下よ。勅ゝる。北法。今やゝゝ。ゝゝ。ゝゝ人ゝ。
立上乃法。大ゝ。世の中一乃さゝ。ゝゝ。ゝ。家の
そ弗ゝ。ゆさ。ゝ。ゝ。ゝ

かしらをけつぬきとりぬくく函事
なりけるとるんぬやーこ紙みくぬやーまさる町こ。
あやーこうんつくぬみるとうを
六十九 高山寺くらやまとの くらんくぬ地とひうきけるよ大きるる
くらるこ。ぬとーーひありあつまるとこ。塩まこるこ。
ひ所の神たるこいひくぬとのうーこぬーけまこいく
あるくきこ。教回あるとけるよ。みるくるこの地こーあ
こるぬるこ。ぬうなく。塩まくらんくーこ。皆人
やーさんけるこ。あのぬくーー人。主ようをこ出皇
ぬこ。くくらんくこ。なんーこくつくとり。ぬこくんよ。兄神
こを称るーこ。こひくーこ。これ塩地ーーこやーさん

たるこんこ。塩こくつーく。蛇こくこ。大井川よぬのーく
ぬるこ。ぬくーこ。ぬくるこ
七十 経文なこの紙こゆみーよ。下こるこ。たんたこるくくて。二
ここの中こひこぬのーこらくこ。ぬくこ。ひき出
ひるこ。ぬつこの毒ぬ。ぬやうよこくこを。花厳流
弘業傳こ。ぬくぬ紙さをこり。長こ。ぬくーのるぬ。
いくくくーこくくーくくく

くのゆとゆくゆくどそそ。海しのゆ。ぬ
あくもいくふくうやゆひけまゆくこのくもゆこ京
くくもゆくうくさくくうゆ。なきれゆ。姉事をんくそゆ。ア
くる悪なれゆいつくをゆ。かくきくんくくそゆひにくゆくと
くくもいくと行くくうくくう

七十二

くふこ島くゆむのねくゆ。くとうくうつひくいくくう島ゆ。
ゆくくうよゆくくをくのゆ。ゆくくあくむ書のゆ。ゆくさ
島なくゆ。拍意のたいくくおくるふ汚半あり。見ハ鶏
くゆ。乃葉条入也ゆ。霜くつなくくゆ志日のくとつく
きくり。鶏くくも。喚子島のくくさ海ゆ。ゆ。ゆてきくゆ

七十三

第の事ゆ。ゆ。ゆ。ゆくくく

用心事ばかりしてきひしく天を拝ませる
ひめくりひてやうぐやうくやつくりうつ時そ
一毛換をもて人をそ地の男やで地ちうきくあう
人の性うんそとるくんぐ覚大すくぐさえまうさう
四月五日 桜の月そうちなくめてうたのやづつとくもず月
ちがくくそわ迷とくぐ思ひとうきくし人ち垂下ゆむ
うう麹ちよまうるう
十五日 はおろの央地ゆくくくけやたくーちくぐさひ年
ゆーぐくくけちうぐくくちりうつまくしはまいうろ
ひやちあやうくひゆくく笑とたむへようわ八歯ろ

はあうよ浄年の人浄安ときくぐ笑とくれ
けまたおくくる識の人白さ拝どきくくる日やぐくくと
りちのくぐるくくくすやてやさんけり
十六日 お丈言ようう楽ちよ拝とくはのおよわう
ちりくくそ桐寿まぐみまろうくくやう雪ろ立検大臣
とくくぐ家ちよくちまくくくぐ老をくけのくくるり
見くうるま大臣ぐ迷寿くとつ通急も血鬱や通鬱雲
とくぐ高ひまのあくくに国ありぐて夷潟ち伝くはよ
来ままくぐくの迷う国のぐくと姿をくかま
平宣時和尚老乃婆はむくくくうまとおぐ元四ちへさ。
あくくひのるやうくうあうくくくとくくとと

やがうぐひすこれのなくてぞくまもなくふる雨ぞこ
ゝぐ世間なるのゆゝしかりけるやうなれとこゝやくとあるまゝうこゝろ
のまゝうてぞうひうこゝうこゝうけとのう
色ぐゝりて世ぐゝ世間とぴうこゝうこゝし
けまもだつるやぶうこゝうけまぴ人ゝまつまわぬん
ちりゆくよ物やあるとぶつくまてまぞとのゆてゝのの
しうもおそくゝ海くゝとめ物おたい
所の棚ゝぶ方器ゝみそのかつゝる張又世ぐゝれそ
おゝくゝぐゝゝ海くゝやゝゝゝたるゝんゝくゝ
ひうゝ数ゝよゝひくゝ奥ゝうゝまゆりゝ世ゝよゝ

かくこゝうゝ海ゝうくゝやゝまゝれき
家内ち人道携器入法系の場ゝ色れたる人道の行へ
世ゝ海ゝまゝうゝまゝうゝまゝうゝまゝうゝまゝうゝまゝを
うゝのうゝいまくゝやゝあぶ物ゝうゝあゝひゝ二物ゝひゝ三物ゝ
海ゝぶうゝこゝうゝの人まくゝ注ゝゝれゝうゝて年ゝこゝよ
海ゝぶ色利の深物ゝひゝりゝまくゝひゝゝれけまゝ用
ゝぶうゝ海ゝうくゝ海ゝうゝのうゝ物ゝ二年ゝおゝゝでゝ年
とゝゝゝぶ油ゝゝてゝうゝをゝゝゝゝゝくゝ海ゝうゝゝれゝうゝゝ海ゝ
ゝゝゝゝ人のゝうくゝゝうくゝ海ゝうゝゝれゝうゝゝ海ゝ
ゝゝゝ人ゝゝゝゝゝ

なるべし。酒をたくさんあつめ、ぶつくてもつきうり、世
世のうの人、とも酒をたくさんあつめ、まつくるほ
をたくさんひつ、酒をもつくしぶとつかも、魂のこと
あるべしも。人間常住の世ひとつくるもの、無一
を。親もとなれば、是世一乃用心や、次に事の
用をうるべしすべ。人の世よりあつ自魂まつくる。所
世をかけ。欲の深くくあるべしやも世をくる。百万の
銭をつるとしてもたくさんくるも、銭をへうすべ所
やむ所なし。賊をたくさんあつ。賊をのち
てつきうかけ。弱をもつくるべしすべ所
よきかをあるとぼうかをへすべ。面白きこと

あるべしとおもくたくさんあつれども、ものをへうす
沢山。銭をあつくくくくつるひ用ものを。
くくあるべしすべ。のとくくくく

求ひ結ぶと賊をもつて禍うひとうるつうあり
不孤あまてつもうるへす。殘あまつも用さしは金玉
者と称するひとうたのひとをきくそ
人間の貴賤ならく貪ぶまへすとやをしら
欲をるくだのひとをんうるとそ賊すり
らうもて灌頂をやむ者は水よあひくひくだりひと
きしうとやをしたりしてやたりあはよいてそ
奥富ときろうるくは寛宥へ理昂よりくそ
欲をを欲をにらを
狐や人よくひつくこのや濱川海よく食人ね
たうを見と狐よくくくに和ちるくくうなちあと

とあるくを下法師より狐三疋うつくをひつさりきて。
力をもくく是とあをくあひ狐二疋とをくひつ
ちを法師ちうはこをあを法師ちをあをくを
を法なうをくをゆへなりあをを
四条黄門命をくれてゆくく殘杯へをてよるくく。
ゆんとる天者なあをる乗つくく絶色のくをいを
めくく芭蕉のるれとを。撰集の五代完を。詠のを
ミ天のをくくをひうよ是をとをを。を故ハ十の完
を。平調ハ入完を下を調やをるよ。勝絶調とを
てたるを上の完。双調ハよ。鬼瘡調とをくを。夕の完。
黄鐘調るを。を次よ。雪鐘調と言く。中乙完。盤涉

調中と云ものあるひは神仙調あるはうやうにぞ
よりは一律とぞなるべくよぶべき所なるよ調まと
ゆくまくしくしくうるとくくうる事ひとしく矣あるよ
ちくあり不技ゐるひ而まてあの宮どのくはるそ是のは
のをあくねはそ物よあるひ吹うくくくしとやしそ
料番のくくうる識よ奥あり生活はまれをうれ
とふくしとしまーうひとはうき徒日よ景義のやはーは
生をそ物くくへおかをくひらうまそくゆくはうるうる
笛はひさくくはうきのうちまくうちくくゆく
きのなれそ宮くくふはのくくよ性番とくくくてひ
とはくくとはおれ宮のくくよはくくくくくくはのくくくくくく

よ源ひくあうまさうまでうへさかよ二月涅槃会
ちうまでは夷舎まくの中ほくとはゆ和尊とひ和義のう
なりぶ一調子とりらくぶ一まのあくともどくのくはう
ちうとう文殊絵のあくさ黄鐘調すうへし光ろ
の調子祇園精舎の無常院のあくや西国ちのう
ちうーしふてうはうくへしとくあまくぶいくれい
まとくどうるくぶりりくと素国ちう弱ぶはまりりどはう
金剛院の種の楽うぶ文ちうくふてうや
建治弘安の比ち家の日比放免のつきはあやく
やうなう縫の布ぶ男殖まくぶるくとはくつくを後
ちうどうーくとしてぐくもの井ぶうう水干ちつを

て京のひたくのひくぶうりーくぶうよふみひはう
なくも奥あつまくをくうひちくくそぶりーうを
老くうう乃志とも乃今日とうくをうやはくろいつを
くの芋と美くぶ迎是くくのかちうてまの乃はりくの
和くとぶかく作きくたくの柚ぶ人ちうくきくぶ川
うくくぶて紙くまりくすぶの天つたぶうーむありはさぶ
いやくつく彩

作者未詳 東二条院へ参りけるぶ老
の長者ちうぶはうう勝利和ちくとぶ為をのそれく
光明あひ真医市絶屋ぶ中きれちくうう紙書子
くくぶふくハ中絶やくくそ念仏まうきくくふ

らんまのことをばなほうねうやかにたれば我宗うれ
しがりそやかまりうつくしつれとそまうさーく猫の
ど長猫よりはーしく巨き豆ちうへーとうきゝ經ふくとゞ
及ゝひとしばくよみそゝろうきゝひてどゝをのゝく
いうくやうんと思ひてだに經のゞーうるようきゝ此
しんえんだらほうとしがつるやゝそがさんけり
八十五
たつのおいとのゝ童りうきゝやゞ鶏と飼のろゆよ
とやうゝ例事や
八十六
阪頭陣まゝ京のゝ道金ゝるどのかつゝく弱まのイ乗
つゝうまつりーのくびゝ逢ひがゝつゝまひろよしど波
まーくまへうゝるまやゝ紙もゝゝものゝうつゝく

をばゝとむかてゝひとつばーくゝぶゝゝりまづゝ
のへとのさめばりゝ御よまゝーの地ともゞゝばゝよ
とうゝーとゝゞ芝かゝまやゝ食物業種なゝ紙ゝゝと
りゝゝ
八十七
多久資うやーけゝゝゝ道面入道蓮のゝ妻ーまゞ奥のう
やゝゝとゞゝゝひく猫の禅師とつひろゝ女子義
てゞゝゝせゝゞゝろき水手まゞりゝもゝとゝゝを烏帽
子とひまへゝるまゝゝ男蓮ゝゝつひりゝ禅師の
むすめゞゝゝゝとつひりゝゞ義とけをつゞ是白拍子
の根元や佛祖の外縁とうゝふゞ後源光行
おゝゝゝとけくまゝゞ後島羽院の北ゝ乗

菊ようをんさきをのまうとして

八十八 後白河院の御時信濃の国に長野なのやまと

いふ所に聖ありけり楽音の法師にて七歳の

年とかやうまれつきしづ心なく花をもとめ

よろづ花びらにたまりかくれ学問をもせず道心

たつとけれども無智にして十二歳ひとつの部をも

ものをさとらず不浄よきをもしらず法華のそれだに

持ぬるのみ山ぶしの家相続とつくるなり

生仏といひけり青侍よりをつかへて

山のまくどとりよりまくのきわにあるのをい

をりくちをくきものをらるに蒲冠者のるをぐ

らさしけりうやうやしくそれをとりてのをり

をる武士ども聞きてうくをたのもしく

思ひ今の聖法師をばうやまふなり

八十九 ある時礼讃をば法上人の弟子安楽といひける僧

経をよみとりつくづくとうちぬる時太秦

景親卿とて法師ありけるを後宮にあり嘲るを

聞一念の念仏の意初や後鳥羽院の御代に

ありまれつる法事讃も同く善親卿ぬるや

九十 千年の精進念仏ぬ永の法師猫まんうれたり

九十一 ちゑ細工ぬおうみ刀とつうみとりぬ親の明

ちしいくくたくを

九十二 又索肉毫ようぞくを拾ありろ藤大納言殿ぞう
き行ーき海上人ともに戸ぞうく毫とうけうよ
みとうけくびう拾ありたそとつんひさうきこ
猟人のやうおぞいいわくびーのそうそうとおれさ
つよくとうれてきくひうをみそりあ絲のこり
孫たを拾ーけうよくそ

九十三 国の別当のうをぞうる元庭丁去るりぞうる人の
のくうくぞうーき鯉といくーたうれと皆人のう
尚入るの庭丁とうくやとぞくくもたやきくうい
てんもいくくたあくひうくとの尚のうぞうく人う

ていしかくく百日の鯉とをきの拾うと今日りた拾うへさ
よあくくすきをくくやうう孝んとくきこれううぞく
ううくくくくくくく奥ありてく人ともを思ありけるや。
ある人が山太夫入るるるうぞやうれうとれこが
やうのくとをのきをぞくやうきうくぞゆうるうぞう
りてよ人なくをよくきくんとりひくんうをけうう
ますんが条百日の鯉とぎくくんうこのうるうく。
けうくくけうくくくくのうをうぞけうくく大
きあうきひくく奥あうるうも奥なくてやきうう
ありのきうのくうう孝くすりきき人の資産なくこと。
つくくけうくくやうぞうるうくうこと。海よよそん

ととぎすをきくとて
よみはとりとりとりをづつくすてをときんと
いひさぶらひのあくろうもやすむとうもくこと
まんと思ひ勝負のまきわさをつきなし
たるむつ
すくく人をさをなを紙すうへさのなりあうへんの
子のをさを海をしあうへうつ父のおうへくんと相
いつとくく史まのえんとひきたつ
しうとをるまのおくをすとをすうへ
なりを又うへ人の評をそ碁法師の相撲くきん
とくひとをしうをふうのひとつをうへ

つまうへ紙つくくつをうへいひあうへ男のゆうあう
うへすとをはゆうのゆうきひきくの柄ありやなしを
をこれもつあとたうへらをひいなをひくふこそめ
くく法師のひいをこのうををなうへるをうきよ
ひ紙をうへうやとをくうへをうきをひきくの
柄をひりのまとうやうひてをくねをすをそあう
人作らまうへ人をすこのすもをくうへう
ゆうをゆうなるをあのをうあうへを豆うへゆるう
うををさをありくくんとをうやくくうへくく
をうへんうををうへ男を老かをふをうへんをうを
まうををうへうくくをうへ人のをうをうをまる

三ろくに思ひつゝくるものや筆のとゝはだれさゝ
まおよぼめ死亦こゝろ氣久しくに人をおいゝろ
よすゝうゝあり

空五

人の物とゝひゝろおもゝしもあゝぞのまく
にいゝんをおこうまゝとうやゝ心まゝうとやうよう
色わゝこゝろゝうゝぬ事やゝゝろ事もれ
ゝゝうゝに思ひくやゝとゝかゝんゝ又減よゝゝぬ人も
なゝうおゝんゝうゝよゝひゝゝをゝゝんいたと
すゝくゝまゝうまゝゝ人をゝゝまゝぬゝとと
わゝゝまゝゝうゝよゝゝくゝもゝゝ人のすれはゝ
ゝゝけゝうゝひゝゝゝまゝゝもゝゝゝのおゝよ

うゝゝゝゝひよゝゝゝゝ

色のゆ　きまくよ来つとうもひとつくのか
きうやあんじうゆ　あもうう　勝のうち
うつうくくくのくくく

うゑ人きうや妻相なくもぞくくうゑ海よをさくくすの
あらひうるに紙ひひつくことを一くゆひつくぞうり
もだくさ海よをそくうゑ筆ひろりひよりとと三条
たた大臣殿作らまさ御前の御のこころ法乃家式紙之乃
人くさうるうるもさくくさ海よをそうくゆ申すゆ撰
さまおすくくまゆりそ

九十九

法法男を殿の自讃くくゆ七ケ条書くめくう事
ありこれ馬義さをくうくとなれ事ととなりうの元
発てくとなりひて自撰のうゆ七あり
一人やくうつくゆ元をわるぞゆ家勝光院の色よ
ていれのくの馬とをくらくひうとをくく今一歳ゆ

たひうゆるくハ馬たくまくく法ハしおりくそうまく
とくくおをもおくうくう又ゆ馬とをもをくくひう而くく。
馬とひをそくふくくのう人法むの中ゆうひひを
河のゆやまくくうくうくゆうとれ歳を

一

面式いうくゆ紙ゆれりくまくくゆ法乃里ゆ紙法而を
つくくゆ源川大納言殿祇園社くくくゆ今用ゆ
事て為りくうくくよ海老の里殿の巻をうひう
巻ゆくくあく今法而をくくひくをくくふくく
をうくむとのゆくとゆ法巻をくくゆくくうあのくゆ法
中とゆ法巻をくくとゆ海法くくゆれめゆ狩くくひ
ふりくくくくゆ狩くくくくゆ九乃

壹ぞうくのそとゝ御ぶうとゝ
とくぐりてさいうをたまさうなのことを思ひやり。
帯の事なまとゞむしーの人もづさうの事とも。
いとくゞ自讃しくるやゞ松島雅院乃法方の袖と
たりとくゞいそのうちよりあーうとまるんやとゞ宝をもつゝみ。
易作りまくるくり

秋の野を入ぎまれ多ありとの毛をこたづよりてくさ
神くゞ袖とゝ西らんと作まとゞ作事ーうきつ海へとゝ
ヤさまくるる事ーもゞ呼よあくらくゞ中このくと芸恨を。
さの奥かるりゞ百宝をかりゞとくくしゞるー
をうき作らなるゞ九象相国伊勢云の歌状のうもゞて

なりくくなる紀題用くとゞきのをくゞ自讃をくれらと
帯と芸乃乃入作天雅の紙を五色つくの芸のやゞ作芸
頭臣清書しくゞくくく

一四 人のうへをすひくに三條の礼のるに行ーに横川の
常行堂のうち諸義院とうきうぬるさ彫りの法
理行成のあひだうちひあつまつて数さとと
や伝くりと尝僧ぐくーに行ーと行成
なくこぐうにあるくーし法理すーと竜也こへの
らとといひちーーにぢりつりの巻の菓子
でつのをけすくとぐくまれのくひくに名み行ーよ
行成法眼ぐりの字。年号ぐうーに行ーうこぐへ
これ奥りへ

五 那栄法ちーくーさ眼安法義をーにへ英といふ

こ紙をまくに誰の紙ぢもいひーと西北こ那
紙ぢこさるーーづりひのうーうるぐれくうやと
いひーーくまこいうこ。数ーー行りさ

一六 賢助僧ぐーにあるひくがはる書水とぐ行ーーにぐ
たくくぬかくに僧ぐうへつまくに行りーに神のかもそ
僧部みーーと法師くーるとぐくりくあさすうこ
ぢるーーさ後ぐうぐ気行ーくそこのくめあくひとい
ひくぐいくえーくぐ出るるーとぐおうひーぐれと
めてぐ行ーをぐといくれーーにぐへうこのくぐやうくく
ていくく

一七 二月十四日月あくこ夫夜ぐうちあくぐ年のてくう

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ようきくはうそくの水うそくをとりつけて中へづつ
もぐりくさりひきよづひきすーくぢれをぢちゝぬくと
ひうへのくさりくらしあいきをよ行るをとりおけつつ
えのそをそ。年月のつゝぶ猿もぶあーを山の
けもぶひつくうしうたきをぶのそくもく
ゆうめずへくぐをそのへどもをるひさうし
たゝへひけをくけたるすだをうへしたをるへん
よつをくもぶをくらぶをすくを羊をたをすし男をを
くぶやーを男のをめをおをさを男をづつくを。
ををしやうをぶへをびをひをたをれをるをけを
ひぬをうへもをををうへくをおをひをををををいを

おうへを猫のをぶうををき東のをうを月をくく
ををみうをたうををの家ふうをしををのをもうを
男をををぶーのををへくをもををしへをををを
まをしをうををを。
望月へをくをををををも位ををやくく
うををぬひをくををへを。一東のをーをををくをくを
ををををへををぬをやをうをし。病へををりをも位をををひを
をくくくを。死をををくををーををををををを病急
をををを死をををりをををををを。夢へ位年ををの毒を
ををくくを生をのをーをををりくくのをを猫ををくく猫ををををを
ををををを思をををを。病ををををくく。死ををををを

時に孫一事を成さんとて、年月思
惑怠と悔くやしけれども、
さて後悔はつかさく、山寺の
てんとに祈りひとおこなひ
もあらしもどろもみくしてゐ
らめ、ちのうまつくいう気ひのこうあ
成しく後悔あつかく、ろこよりときて孫つ人
うもいめ幻のはれやはるとうるきしずくに
孫皆無おもりに孫ひ山寺にもやく
ちつくるとも、うとてつ、ものとて、弟ト
しくろよりはずうに孫なくて心多ふう

百三

ゆくあつうるり
ゆくあるへ一ぬ長ひくつくりあくゆきびくへ苦
楽のたあなり楽といつあるこのもろ事やごと
とおくしやしけるり楽欲もろ孫二まりあり。
ろよ二種あり孫紅と戈蘭とのかれや二まる
又歌三まる楽るりろ所のねひひ三まいう
ゆ是頭絡のおろおくろくのろうひ
ありりあのしまるこ

百四

八まるる年又ゆくいく仏ゆいりる
地ようひしといりる仏ゆ人氏成ゆ
とみ四人を絡ゆく仏ゆ成ゆやしとど

又佛のをしへたまふところ
數ひきろ仏ちゝ行の數ひきろ
みさらの佛つをしへ
ちゝをしへ一めいの第一の佛をつ
佛ちゝひきろ
つまやこ法たんのひくごらのつめろ
こゝをまろ行ちゝ法ちゝ奥ち

正保七酉南呂吉旦開板